

元四條畷市職員  
四條畷市民の力 代表

ぜにや 翔



Facebook Youtube



編集・発行 四條畷市民の力

〒575-0002 四條畷市岡山2-1-56 ヴィラクレスト203

Mail shijonawate@peoplepower.jp 発行日 2024年12月 発行人 東修平

この市政報告書については、政治団体「四條畷市民の力」の刊行物であり、市の予算などは一切使用されておりません。

四條畷

市民  
の  
力

四條畷市民の皆さんへ

市政報告

四條畷市長  
四條畷市民の力 主宰

東 修平



# あなたと進めた、 新しい瞬。

東修平

第5代 四條畷市長

## 「新しい瞬へ」

この思いに共感いただいた多くの方々のお力により、2017年1月に、私は第5代となる四條畷市長に就任いたしました。就任時の所信表明で「誰よりも四條畷市を考え、誰よりも四條畷市のために行動する」とお誓い申し上げたとおり、一心不乱に市政運営に邁進する日々が続きます。

2020年12月には、「ともに進める、新しい瞬」を掲げて2期目に挑戦。100年に1度と言われた感染症の最中であり、公務に集中して十分な選挙活動ができなかったにもかかわらず、1期目より多くの皆さまからご支持を賜り、再任させていただきました。

ここでは、これまで8年間にわたって市民の皆さまとともに進めてきた「新しい瞬」について、私が市政運営のバトンを引き継いだ当時の状況を四條畷市の歴史とともに振り返りながら、お伝えしたいと思います。

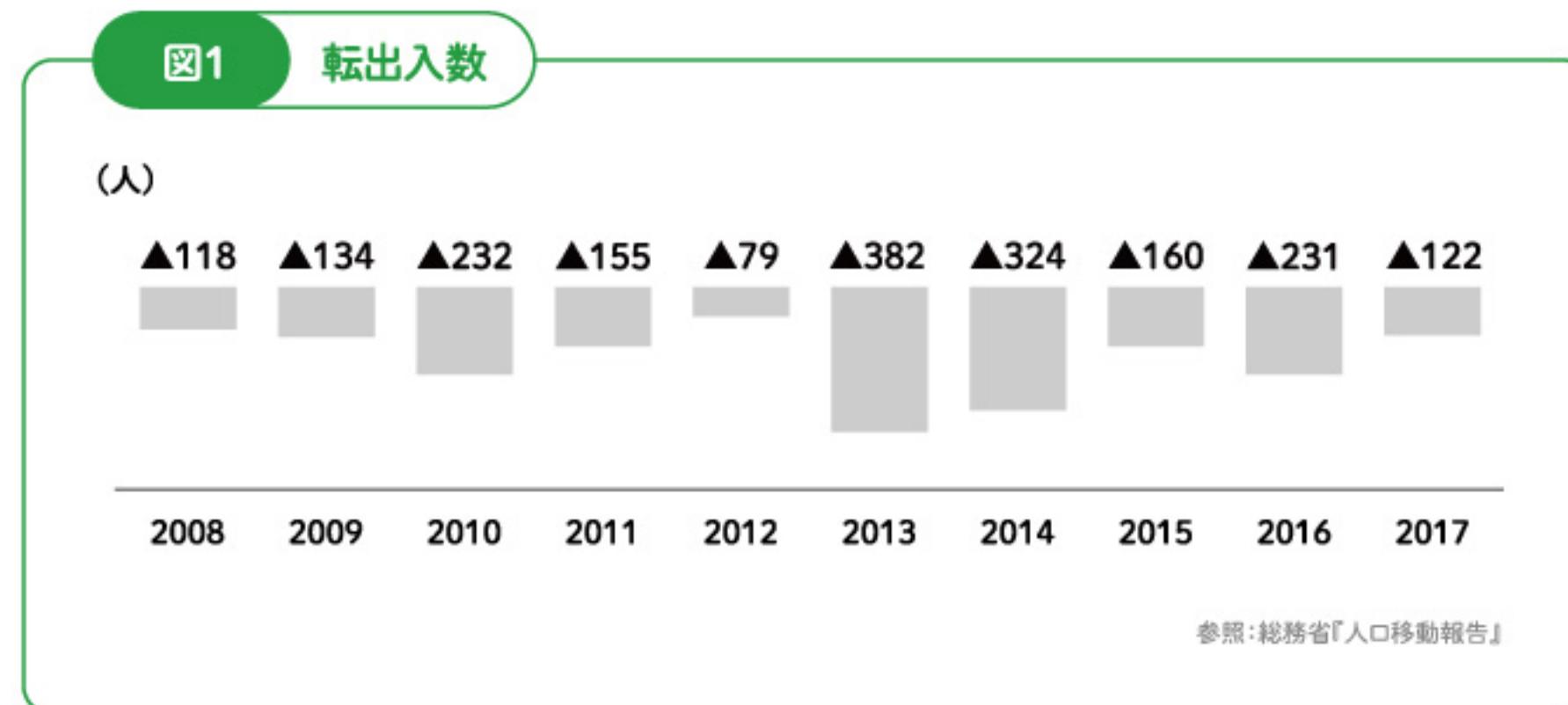
### 止まらない人口流出

今から54年前の1970年。当時の四條畷町が市制を施行し、人口約3.6万人の四條畷市として歩みを始めました。そこから都市化が一気に進みます。

しかし、急激な進展には痛みが伴いました。2万人もの人口増加に対応すべく大型の建設事業を重ねた結果、借金が大きくなり、1997年には実質収支が赤字かつ基金もほとんどないという財政上の危機を迎えてしまいます。そこからは、かの夕張市のような財政再建団体へ転落することを回避するため、市を挙げて財政健全化に取り組むことになりました。

職員による懸命の努力をはじめ、議会のご理解や市民のご協力により、2007年には11年続いた実質赤字から何とか脱却。しかし、依然として厳しい財政状況であり、引き続き削減を主体とした市政運営とならざるをえず、新しい政策に十分な予算をかけることができない状況が続きます。

結果として、大都市近郊の緑豊かな住宅都市という本来は魅力的な環境にも関わらず、転入者よりも転出者が上回り続け、私が就任した2017年には、10年連続で人口流出が続いている状況となっていました(図1)。



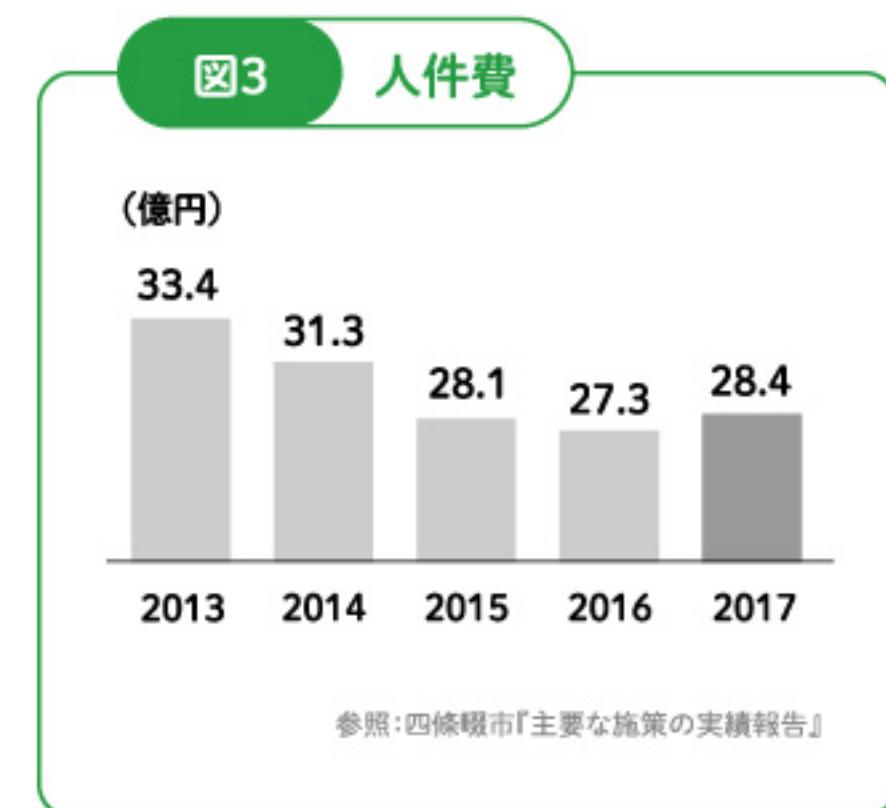
## 悪化する財政構造

さらに、財政上の固定費にあたる義務的経費において、2つの課題が生じていました。

1つ目は、公債費(借金の返済額)の上昇です。財政健全化に取り組む間は、なるべく建設事業を控えて借金の返済に専念し、公債費を年々減少させてきました。しかし、過去一斉に整備した公共施設やインフラが、今度は一斉に老朽化し始めたことで、それらの改修予算が必要となり、2017年から公債費は再び上昇を始めました(図2)。

2つ目は、人件費の上昇です。2010年代は、団塊世代の方々が一斉に退職を迎えたことで、人件費が毎年下がっていく傾向にありました。しかし、その流れも2016年で終わり、2017年からは、団塊世代の方々と入れ替わる形で入庁した若年層職員の昇給が始まり、人件費が上昇傾向を迎えます(図3)。

こうした背景から、就任直後の2017年当初予算(一般会計)では、政策的予算をほとんど盛り込んでいない骨格的予算にも関わらず、財政調整基金を5.3億円も切り崩す必要がありました。すなわち、必要最低限の予算すら基金に頼らざるを得ない厳しい財政構造となっていました。



## 改革への決意

ここまでが、私が就任した2017年時点で四條畷市が抱えていた課題です。こうした非常事態とも言える状況のなか、政治経験も無く、28年しか人生を歩んでいない人間が、できることはいったい何か。考えに考え抜いた結論は、これまでに市が着手できなかった取組みに果敢に挑戦すること。次世代に責任を持って四條畷市を繋いでいくために、しがらみがないからこそできる改革を、愚直に進めることでした。

そこまで、就任直後より徹底した事業見直しに着手しました。市のすべての事務事業を調査したところ、1782の事業・事務が存在し、計95.4万時間をかけていることが判明。それらすべての事務事業について、すべての課長から1つひとつヒアリングを行い、廃止・効率化・現状維持・拡充と分類分けを実施しました。その上で、2018年1月には『第2次行財政改革プラン』を策定。以降は、危機的現状を何としても打開するために、全庁一丸となってこの改革プランの実行に取り組むことになります。

## 対話と反省の日々

この行財政改革プランに盛り込んだ内容は、言い換えれば、過去20年にわたる財政健全化の取組みを経ても、なお積み残されてきた課題に対する取組みです。当然ながら、実行に際しては多くの困難が伴うことが想定されました。

そのため、なるべく多くの市民の皆さんに、市政の現状と、行財政改革の必要性を知っていただきたいとの思いもあり、2017年12月より「地域と市長の対話会」を開催。度重なる直接の意見交換を行う日々が続きます。

しかし、府内外にわたる多くの改革を一気に推し進めたことにより、様々な点で至らない点が生じたことは事実です。特に、行政主体ではなく、市民主体の事業推進をめざした団体事務局の移管事業や、団体に支出する補助金を見直した既存補助金のあり方検討などでは、改革を急ぐあまりに、各種団体の皆さんからは様々なご指摘を受けることとなりました。

それでも、先人から受け継いだ四條畷市を、すべての世代が希望をもって暮らせるまちにしたい。そのために、未来に資する事業にもっともっと投資ができるように何とか行財政改革を成し遂げるんだと、いただいた厳しくも温かいご指導を金言としながら、信念を持って改革に邁進いたしました。

## 11年ぶりの転入超過



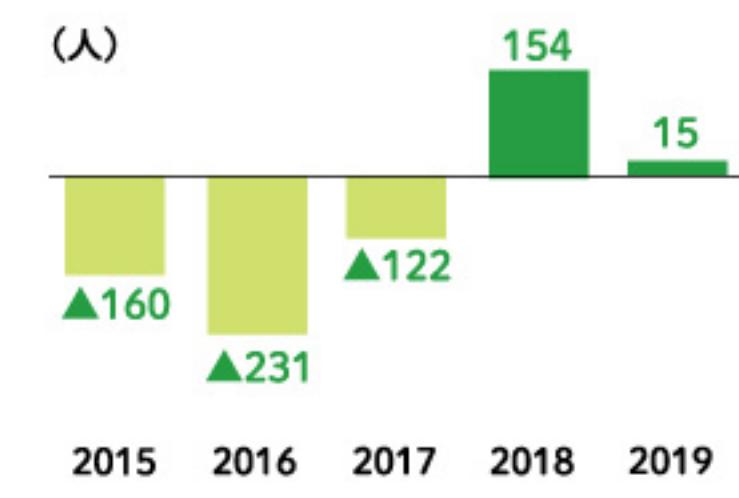
林有理 前・四條畷市副市長

ただ、いくら財政健全化を進めても、住宅都市である四條畷市は人口の流出が続ければ未来はありません。そのため、行財政改革と並行して市の魅力づくりも進める必要がありました。その推進役を担ったのが、全国公募により1,700名の応募者から選出され、副市長に就任した林有理さんです(左写真)。私が財政健全化と市民との対話に専念する一方で、民間企業出身(元『スモマガジン』編集長)で、就任時には0歳児の子育てをしていた林副市長には、魅力あるまちづくりに向け

た政策と、府内体制づくり(職員との対話)を担っていただきました。

魅力づくりについては、府内の若年層職員の提案をもとに、子育て支援施策を中心に拡充してまいりました。同時に、こちらも民間から公募したマーケティング監を先頭に、積極的な広報活動にも取り組んだ結果、11年ぶりとなる人口の社会増(転入超過)となりました(図4)。

図4 転出入数



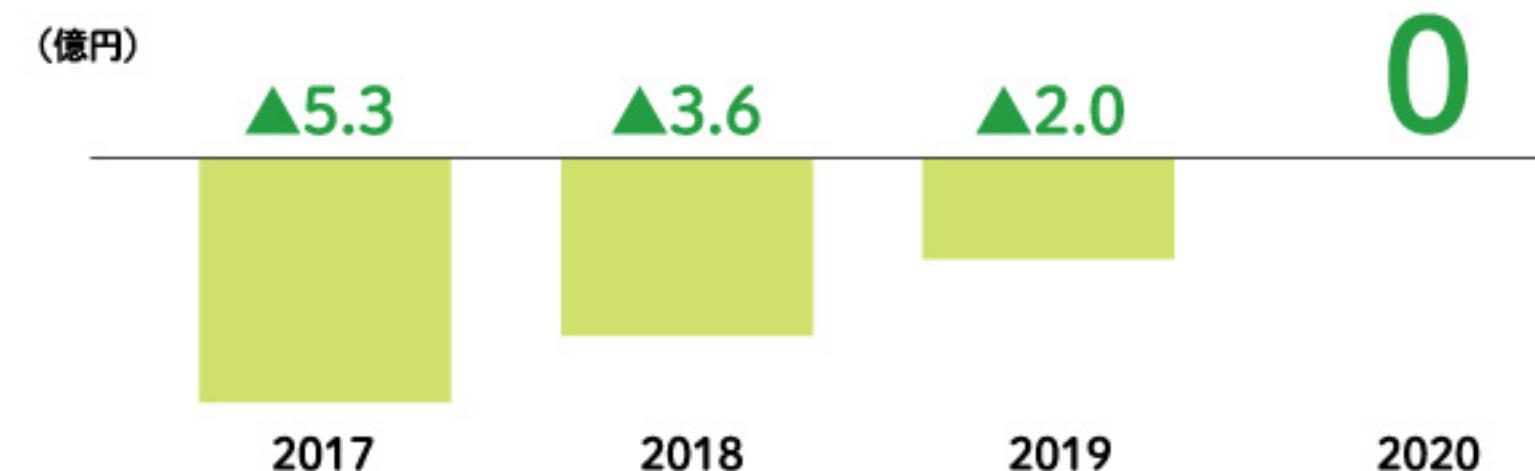
参照:総務省『人口移動報告』

## 31年ぶりの財政健全化

人口動態の改善とともに、懸命に取り組んできた行財政改革についても効果が現れ始め、予算編成時に取り崩す基金が徐々に減ってきました。

そしてついに、就任時の2017年には5.3億円の基金を取り崩さなければ必要最低限の予算も組めなかったところから、2020年の当初予算(一般会計)においては、財政調整基金の取崩しや他基金からの借入れをせず、予算を編成することができるまでに至りました(図5)。これは平成始まって以降初めて、31年ぶりのことであり、まさに財政構造が健全化した証と言えます。

図5 財政調整基金の取り崩し額(一般会計当初予算)



参照:四條畷市『一般会計歳入歳出予算に関する説明書』

## コロナ禍を経ての決断

こうした人口の社会増や、財政構造の健全化という明るい兆しが見えてきた矢先。世界中を襲った新型コロナウイルス感染症に、四條畷市も立ち向かうことになります。そのため、2020年からは市民の皆さまの命と生活を守るべく、財源や人員をコロナ対策へと重点配分してまいりました。

そして、集中的なコロナ対応が落ち着いてきた2022年9月には、これまでの行財政改革の成果をもとに、四條畷市としては初めてとなる『中期財政計画』を策定。この計画は、これまでの行財政改革プランと異なり、削減を主体とした財政運営から、健全な財政を維持しつつも活力あるまちづくりの実現をめざすべく定めた財政運営の指針です。

このように財政運営が大きな転換点を迎えたことに加え、2018年に人口が転入超過となって以降、5年間で3度の社会増を達成し、選ばれるまちへの兆しが見えつつあったことから、市長としてある決断をいたしました。

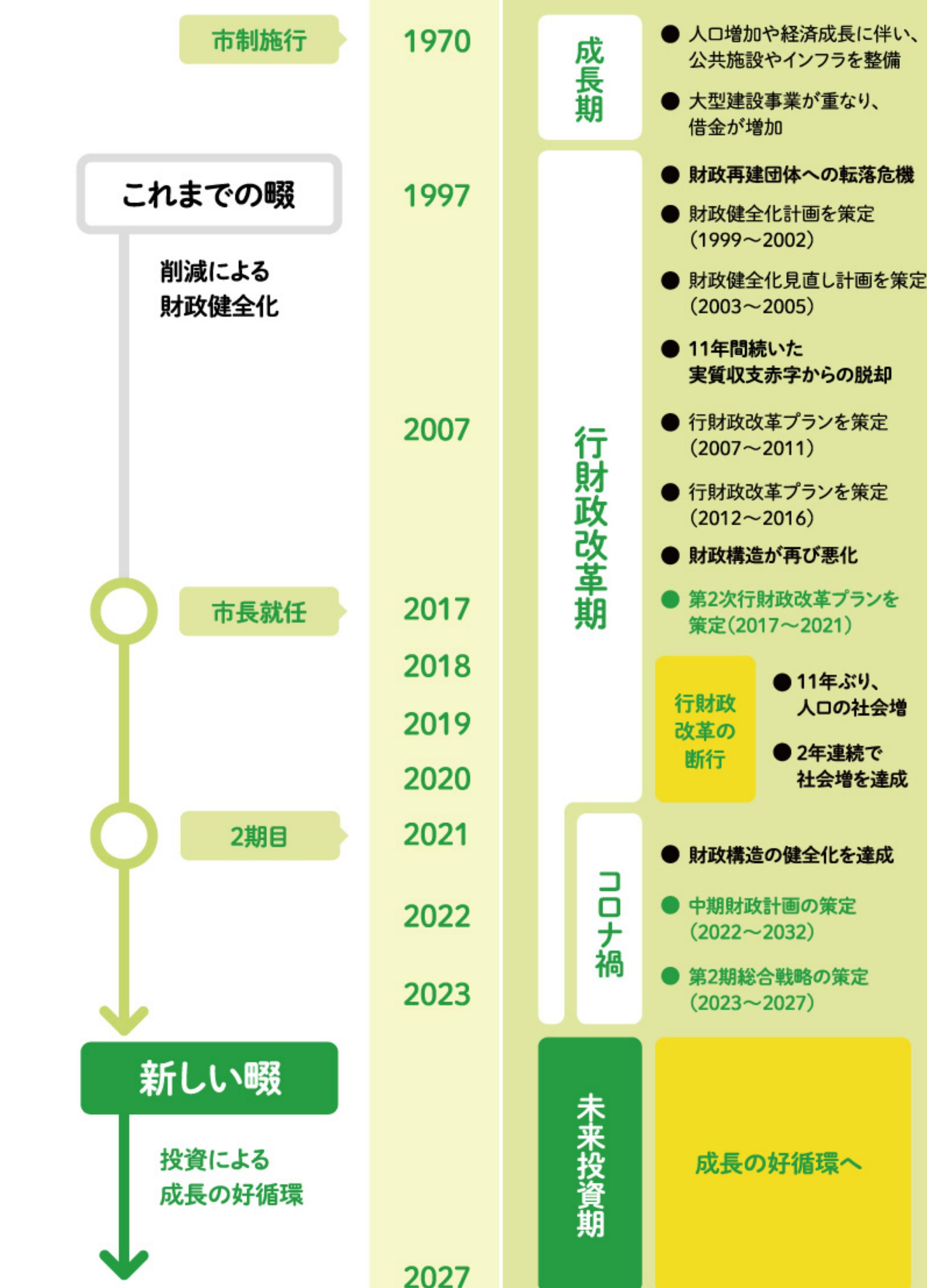
その決断とは、これまでの長く厳しい行財政改革に関係したすべての方々への敬意と感謝を胸に、成長による好循環を実現する市政運営へと大きく舵を切ることです。

## 新しい瞬へ

その決断のもと、2023年3月に『第2期総合戦略』を策定し、2023年から2027年までの5年間を「未来への投資期間」と位置づけました。そして、2023年度より、成長分野において5年間で約50億円規模の集中的かつ大胆な投資を推進。職員が知恵を絞り、市民の皆さまの思いを形にしていくこれからの四條畷は、今よりもっと魅力的になると私は確信しております。

以上が、市長就任時から、市民の皆さんとともに進めてきた「新しい瞬」の概要です。改めて、今日に至ることができたのは、先人方々のご功績はもちろんのこと、市議会議員各位の深いご理解をはじめ、市民の皆さまの温かいご協力、そして市職員の尽力のおかげです。この場をお借りしまして、心から感謝を申し上げます。

第5代 四條畷市長  
東 修平



# 市政報告

● ご挨拶 あなたと進めた、新しい瞬。 -----	1	● 実行した政策 -----	32
● 起きた変化 -----	10	特集 新型コロナ・物価高騰への対応 -----	34
持続可能なまちへ -----	12	分野1 誰もが安心して暮らせるまちへ -----	38
健全な財政構造へ -----	16	分野2 今よりもっと暮らしやすいまちへ -----	45
前向きな市役所へ -----	20	分野3 子育て・教育のまちへ -----	53
● 対話 対話重視のまちづくり -----	24	分野4 魅力と活気に満ちたまちへ -----	62
芦屋市長 高島 嶺輔 × 四條畷市長 東 修平		● 対話 前副市長とともに振り返る4年間 -----	72
		前四條畷市副市長 林 有理 × 四條畷市長 東 修平	
		● なぜ、2期8年で退任し、後任を全国公募したのか -----	80
		● ぜにや翔さんに、私はバトンを託したい -----	86

## 起きた変化

持続可能なまちへ ..... 12

コラム1 子育て世代が増えるとどうなる? ..... 15

健全な財政構造へ ..... 16

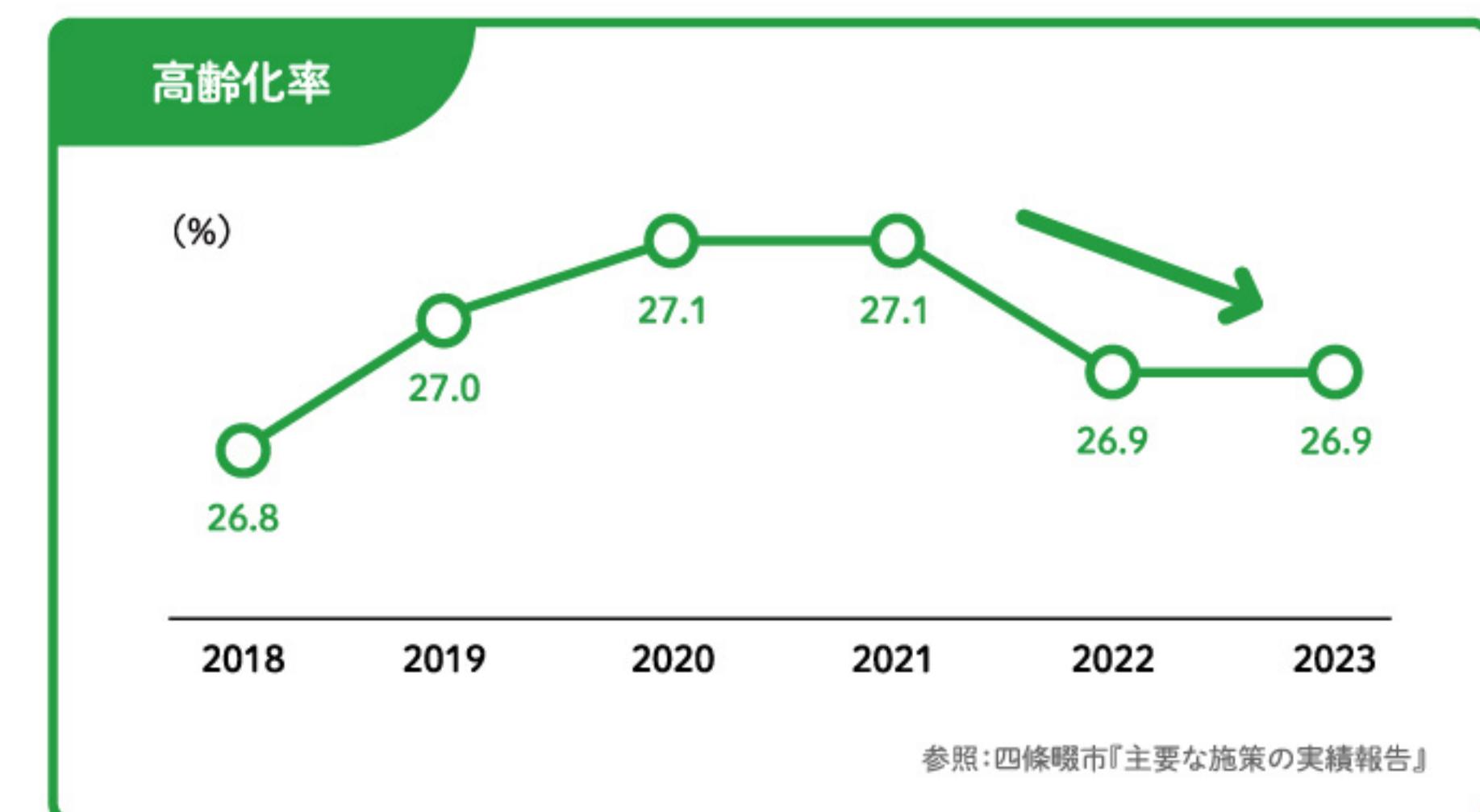
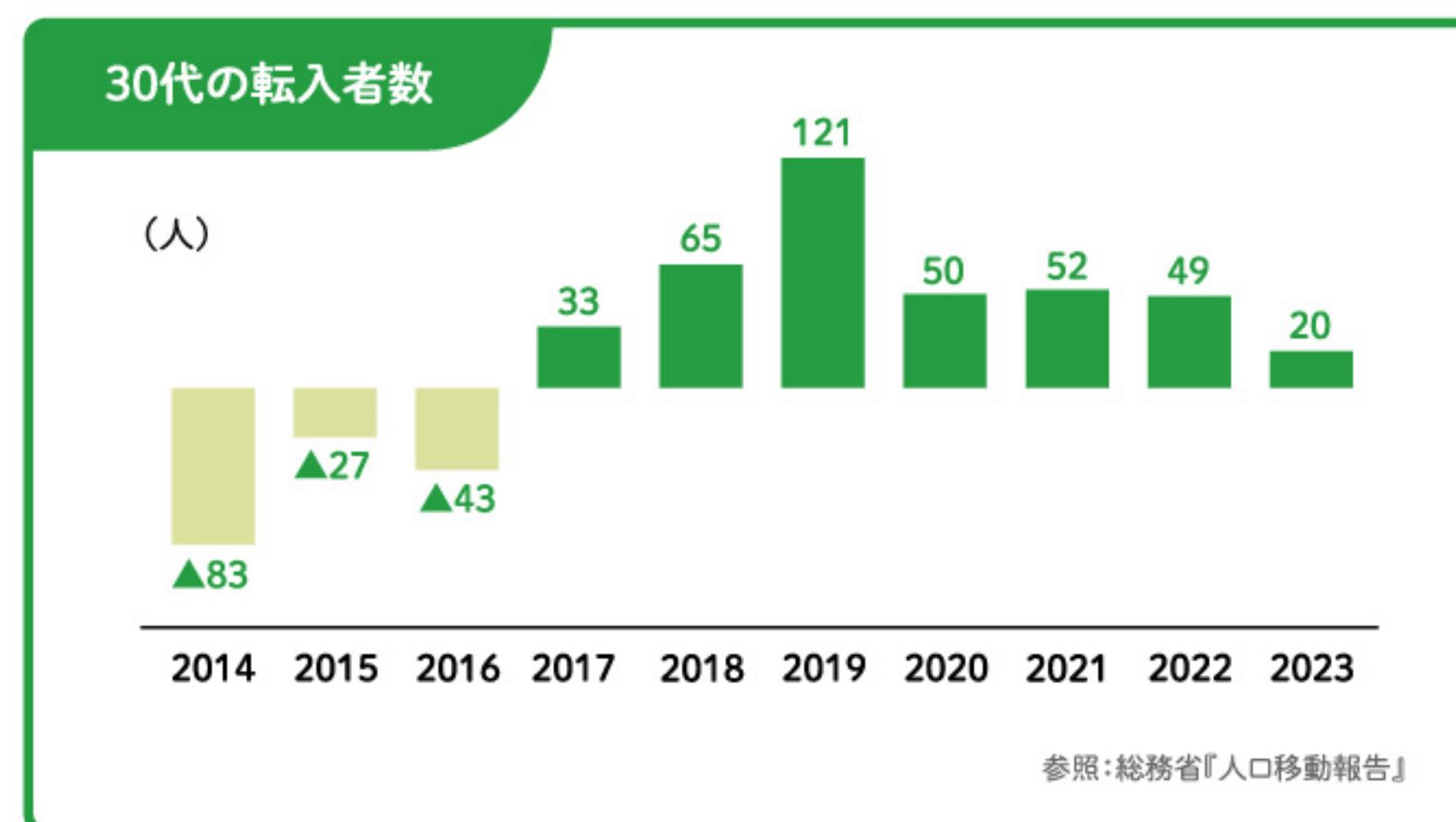
コラム2 周りの市と比べて借金は多いの? ..... 19

前向きな市役所へ ..... 20

コラム3 国への働きかけはできているの? ..... 23

## 持続可能なまちへ

## 子育て世代の 30代が転入超過



転入超過を**7年連続**で達成

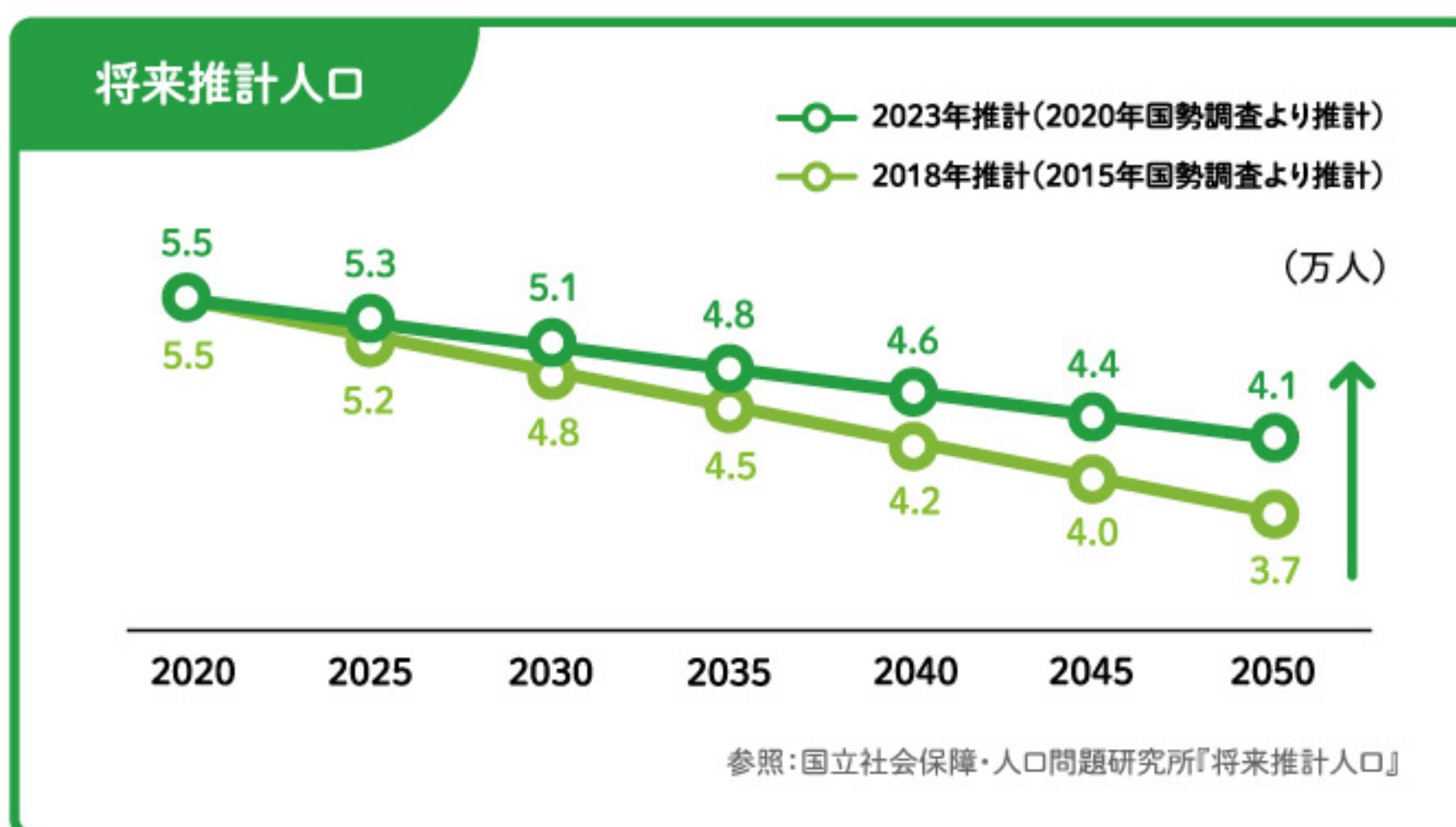
2017年に市長に就任して以来ずっと、子育て世代である30代の方々が転入超過となっています。全世代で見ても、市長就任前は10年以上連続して転出超過となっていましたが、直近6年で3度の社会増を達成。少しずつですが、子育て世帯から選ばれるまちになってきたことが、数字からも分かります。

持続可能な人口比率へ

30代の方々の転入が続いている等の理由から、四條畷市では全国の動向とは異なり、高齢化率が減少しています。市の人口ビジョンでは、持続可能なまちづくりに向けて、令和32(2050)年時点での生産年齢人口(15~64歳)の割合が50%以上となることをめざしています。

持続可能なまちへ

## 将来推計人口の改善



2050年人口が約4,300人増加

5年に一度、国の機関である「社会保障・人口問題研究所」が、すべての自治体の将来人口を推計しています。昨年2023年に発表された結果では、四條畷市では大幅な改善が見られました。この喜ばしい兆しを確固たる流れとすべく、市では「未来への投資」を積極的に進めています。

コラム1

## 子育て世代が増えるとどうなるの?

税収が増え、  
全世代の福祉向上へ



7年で2.9億円増加

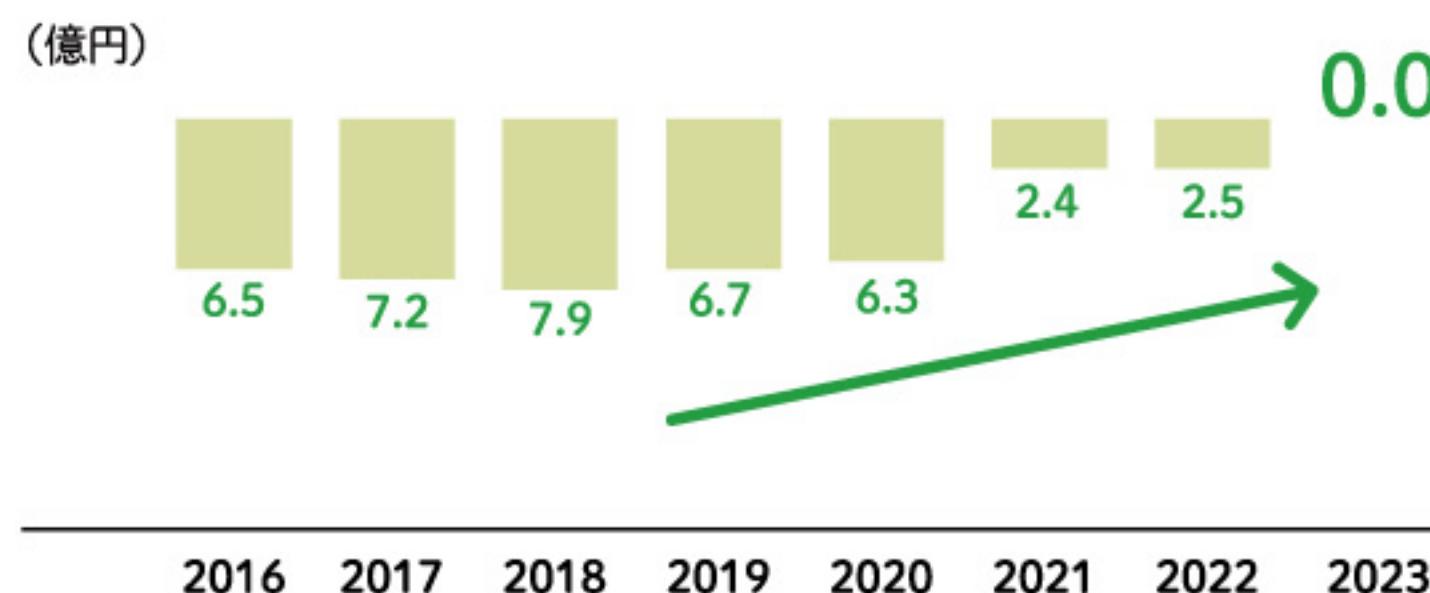
子育て世代が移り住んでくれることで、税収が増えます。結果として、すべての方々への行政サービスを充実させることができます。すると、四條畷市を魅力に感じてくれる方がさらに増えることになります。7年前に起きたこの好循環が、コロナ禍を経て、確固たる流れになりつつあります。

## 健全な財政構造へ

### 財源不足を補う 借金が不要に

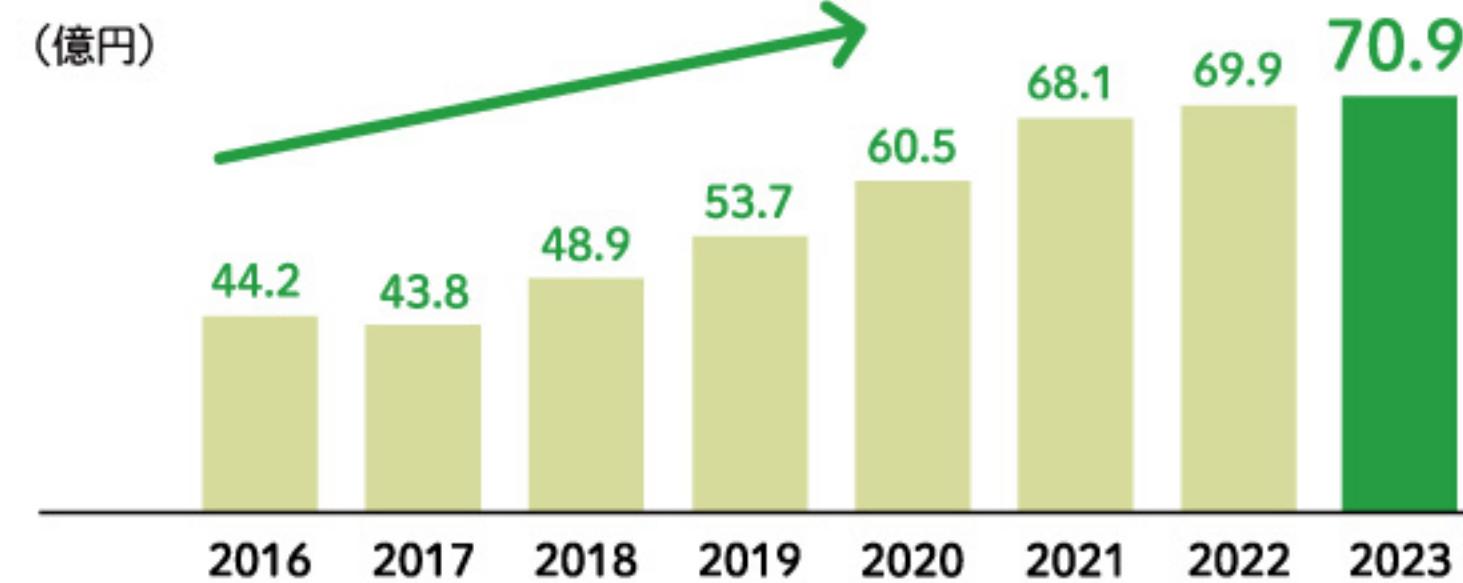
### 基金の堅実な増加

臨時財政対策債の発行額



参照:四條畷市『主要な施策の実績報告』

基金残高(一般会計決算)



参照:四條畷市『主要な施策の実績報告』

### 2001年の制度創設以降、初

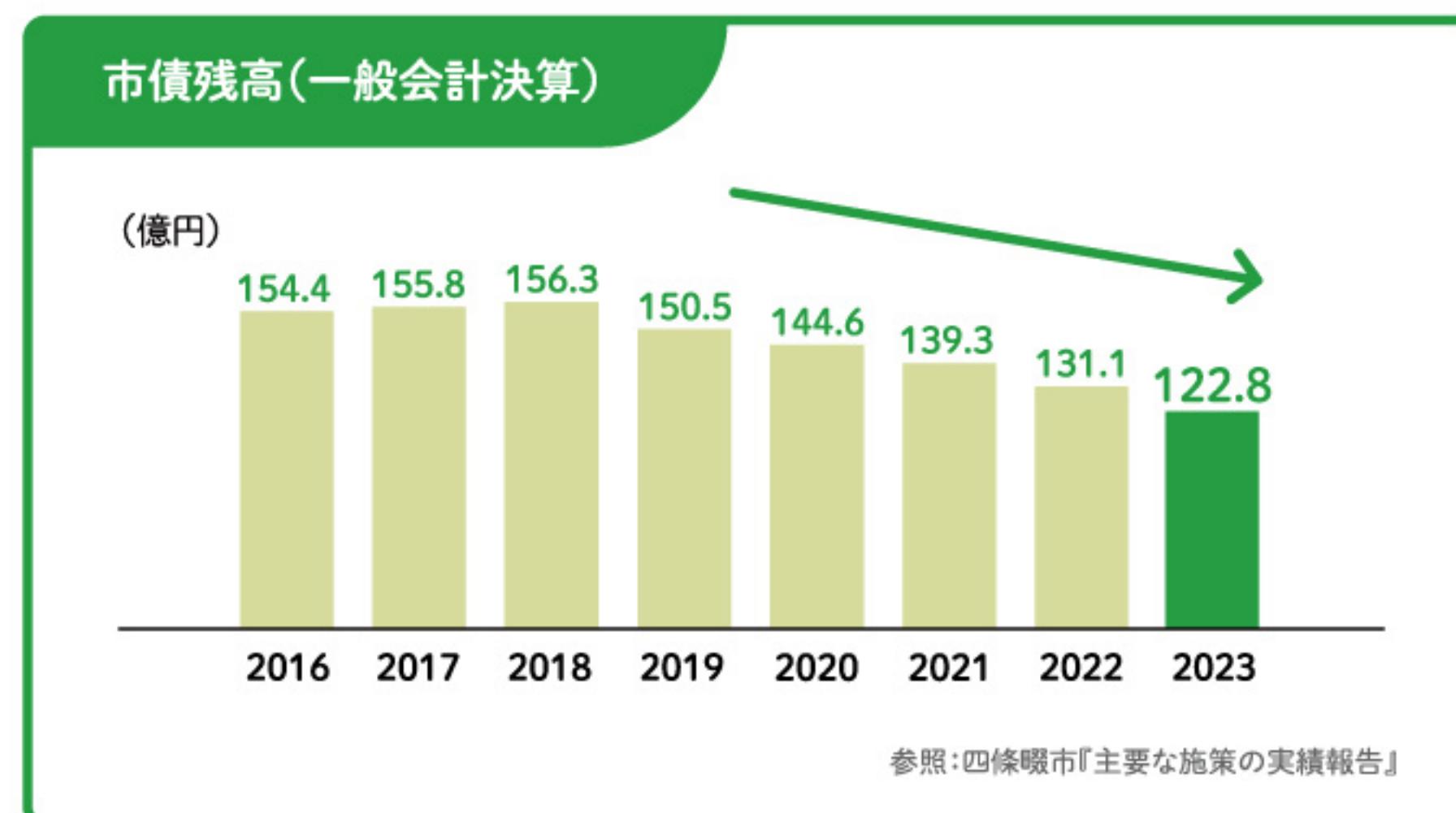
### 7年で26.7億円増加

臨時財政対策債は、本来は国から交付税として交付されるお金が充分に交付されない時に、自治体が財源不足を補うために発行する借金です。四條畷市は、制度創設以降22年間ずっと発行してきましたが、行財政改革により、こうした借金をせずに済む健全な財政構造へと転換しました。

高度経済成長期に整備した公共施設をはじめ、道路などのインフラが老朽化してきているため、市の貯金(基金)の積立は必須です。コロナ禍では市独自施策を実施し、2023年度からは「未来への投資」を積極的に進めている一方、市では貯金(基金)を着実に積み立てることができます。

## 健全な財政構造へ

## 借金の着実な減少

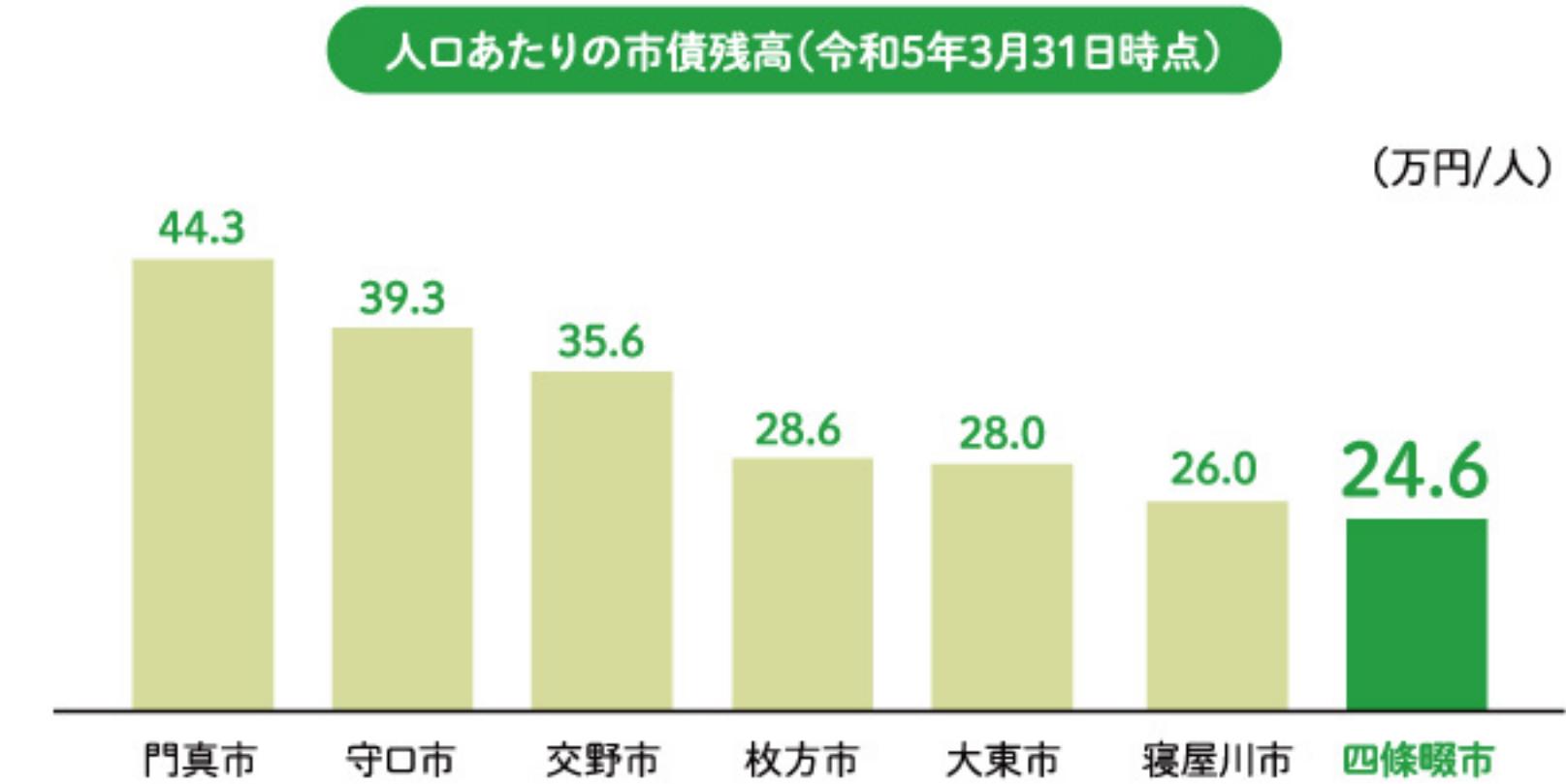


7年で31.6億円減少

市債は、いわゆる市の借金です。借金が大きければ、支払わなければならない利子も大きくなります。四條畷市では、将来世代に負担を先送りしないために、「未来への投資」を実行しながらも、借金の着実な返済を進めています。

## コラム2

## 周りの市と比べて借金は多いの?

北河内7市で  
最小の借金

市民の皆さんの中には、「四條畷市は借金が多い」という話を聞いたことがある方がいらっしゃるかもしれません。しかしそれは過去の話。長期にわたる行財政改革により、例えば近隣の北河内7市と比べても、四條畷市の借金(市債)は、人口あたりで見ると最小となっています。

前向きな市役所へ

## 徹底した市民との対話

### 「地域と市長の対話会」アンケート結果

実施回数

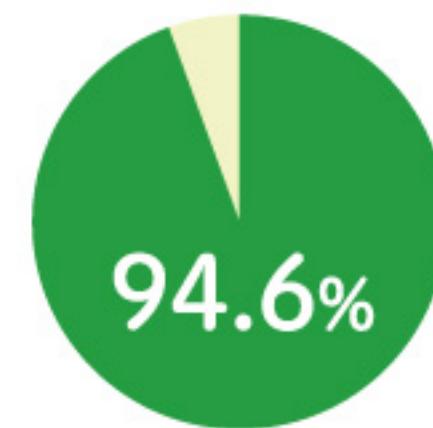
**148回**

参加数

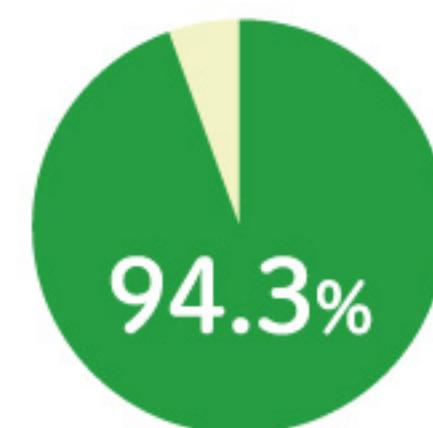
**3,013人<sub>延べ</sub>**

アンケート回答数

**2,768人<sub>延べ</sub>**



参加して  
よかったです



また参加  
したい

参照:市ホームページ

## 大阪府内で上位の 情報発信力

### 自治体公式SNSの人口あたり登録者数 (2024年7月2日時点)



**2位**

32  
市町



**3位**

41  
市町村



**3位**

42  
市町村

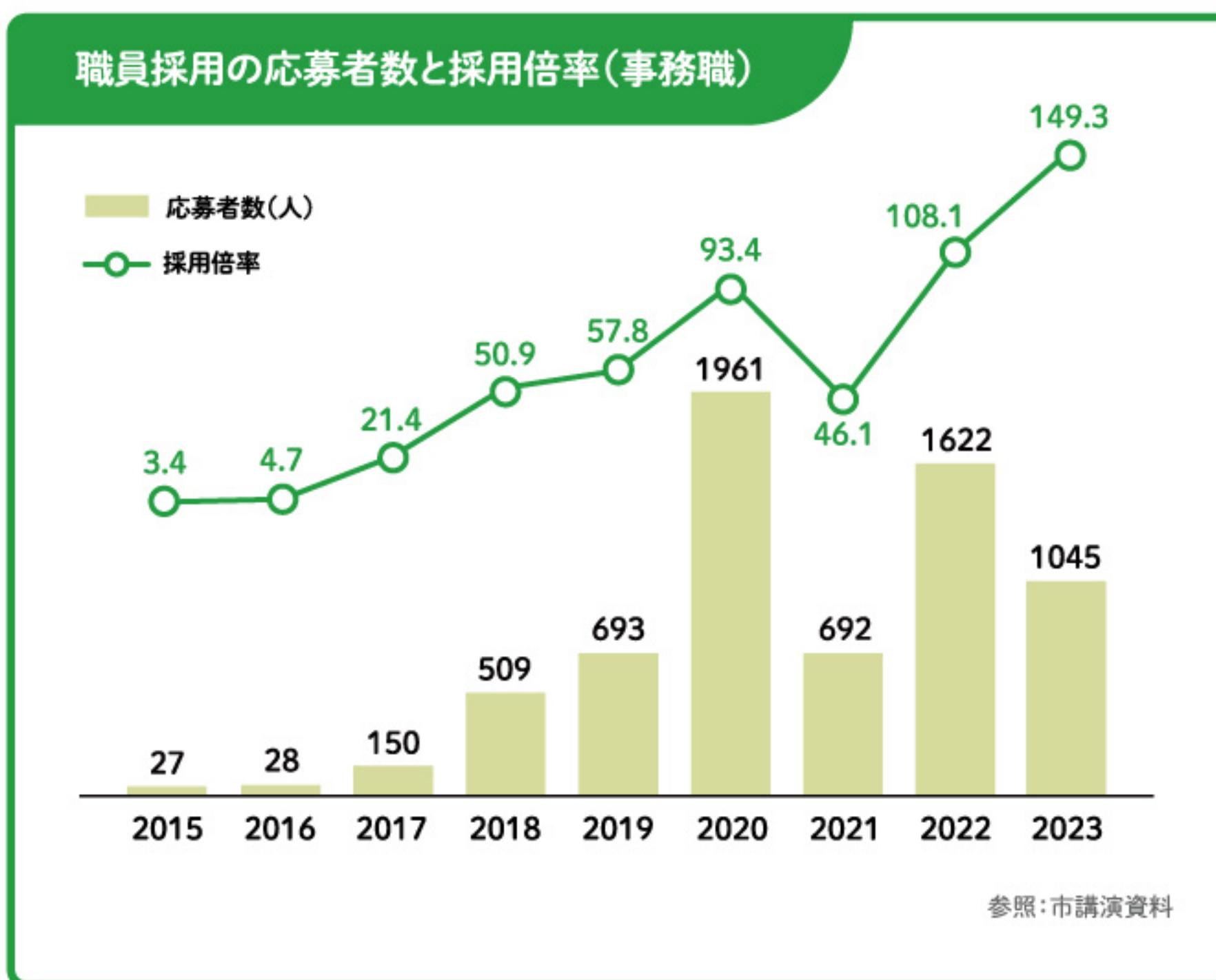
参照:各市町村のSNSから

市の取組みを市民の皆さんにお伝えするため、そして何より、市民の皆さんの考え方や思いを市政へ反映させるために、各地域ごとに直接の意見交換会を行っています。なお、市政の透明性を確保するために、すべての対話会の映像は、議事録とともに市のホームページに掲載しています。

市民の皆さんに、市の情報を即時にお届けするためにSNSの活用に力を入れており、皆さまのご協力のおかげで、登録者数が着実に伸びています。また、広報誌についても、いたいたご意見をもとに定期的な改善に努めており、アンケート結果においてもご好評をいただいているです。

前向きな市役所へ

## 人材が集まる市役所に



行政サービスを提供する中心となるのは、市役所の職員です。そのため、より良い人材が市役所に集まることは、行政サービスの向上にとって欠かせません。全国に先駆けた前向きな取組みが注目されていることで、四條畷市は現在、高い採用倍率で職員を採用することができます。

コラム3

## 国への働きかけはできているの?

### 国からの特別交付税が着実に増加



大阪府内33市で最大に  
(人口あたりの交付額)

特別交付税は、普通交付税とは異なり、市の特別な事情を考慮した上で国からいただけるお金です。言い換れば、いかに国に市の取組みをアピールするかで、交付される額が変動します。四條畷市は、積極的に市の状況を国に説明し、結果として交付額が着実に上昇してきています。



## 対談

# 四條畷市・芦屋市が行う 「対話重視のまちづくり」

四條畷 東市長 × 芦屋 高島市長

## “そのまちに住んでいない”から できること

**東** 早速ですが、高島さんが芦屋市長になって1年4ヶ月。芦屋市に住んだ経験のないなか市長を務められていますが、いかがですか？

**高島** 住んでいなかったからこそその一番の良さは、先入観がない点です。「これすごくいいね！」「これは変えたほうがいいんじゃないかな」というのを公平に見られる気がしています。

**東** 高島さんは、さまざまな取材の中で「『できない』を分類しよう」というお話をされていますよね。詳しく教えていただいてもいいでしょうか？

**高島** 市長就任初日に、市役所の職員に向けて「『できない』と答えるとき、違法だからできないのか、常識外れだからできないのかを伝えてほし

い」と話しました。最初にその話をしたことで、職員が明確に理由を説明をしてくれるようになります。「常識外れだからできない」と言われた場合は「本当にそうなのかもう一度確かめてください」とお願いをし、数日後に「やっぱりいけました」と結論が覆るケースもありました。

**東** どんな事例がありましたか？

**高島** 昨年度から芦屋市は企業版ふるさと納税を始めました。しかし、企業版ふるさと納税の決まりのなかに「不交付団体で三大都市圏の形成市街地等に所在する市区町村は対象外」というものがあり、芦屋市は対象外だと多くの職員が思っていました。しかし、「本当にそうだろうか？」ともう一度調べてみたところ、芦屋市は例外に該当し、制度を活用できることには今も力を入れています。

**東** まさに先入観がない高島さんだからこそ変えられた点ですね。逆に、芦屋市に住んでいなかったからこそ難しかった点はありますか？

**高島** やはり、仕組みや決まりができるまでの経緯を把握できない難しさはあります。役所の中の話だけであれば良いのですが、自治会の話、経緯経過の話などは知らないものもある。たくさんの方にお話を聞きながら乗り越えています。

**東** 私は四條畷市で育ち、四條畷市の市長になりましたが、それでも自分が生活しているエリア以外についてはあまり知らなかったんですよね。また、長く生活しているからこそ見えていないもの、限界を決めてしまっているケースもあります。それをいかに対話を通して崩していくかが重要だと感じています。

## 役所 対 市民の対話にしない。 市民同士の対話を作る仕掛け

**東** 対話を促すために意識して行っている施策はありますか？

**高島** 「市民 対 市役所」の対話だけでなく、市民同士で話す環境を作るよう心掛けています。例えば対話集会では市民から質問をいただいたとき、すぐ答えるのではなく、あえて「どう思いますか？」と他の方に問いかけるようにしています。すると、周りの人も「何が芦屋市にとって一番良いのか」を考えくださるんです。考えていただいたあとに「実は芦屋市ではこんなこともあります」と取組を伝えるようにしています。

**東** 面白いですね。実は四條畷市で行っている対話会でも、市民と市民の対話の場になるよう心掛けています。例えば四條畷市には、大きなバスが両車線に行き交う狭い道路があります。道路の拡幅事業を進めているのですが、一部の市民の方から「もっと早く進められるのではないか」「早くしないと危ない」と意見が挙がっていました。一方、道路を広げるということは、そこに住んでいる方の生活を奪うということです。ある対話会に、沿道住民の方が参加しておられ、「いま私はそこに住んでいて、市役

所と話し合いを進めています」と話をしてくれたんです。すると、「早く道路を広げてほしい」と主張していた人も、沿道住民の方の声に直接触れ、腹落ち感が全く違ったんです。

**高島** 芦屋市のとある地域では、「基本的にみんなでビジョンを創ってください。行政は後ろから支えます」というスタンスでまちづくりを進めています。昨年度末、その地域のバス通りで歩行者天国をやってみたいとなり、住民の方が主体で実施しました。一度試すと「こんなふうに使えるんだね」「次はこうやってみようか」と新しいアイディアが市民からどんどん出てくる。対話が中心にあると、市民の皆さまにより関わっていただける余白ができ、地域の皆さまが主役になれる。対話の重要性はそこにあると痛感する出来事でした。

**東** 対話によるまちづくりの肝は「待つ」ことにあると思っています。しかし、私自身は一期目にそれに気づけず、焦って前に進めようとした結果、市民の自分ごと感（オーナーシップ）が離れてしまう場面も経験しました。高島さんには、はやる気持ちの



ようなものはありませんか？

**高島** もちろんあります。早く進めたいと思う瞬間もたくさんありますし、「そのために私を選んでくれたのだから」と思うときもあります。ですが、ここがまさに対話の出発点だとも思っています。行政は「こんな制度が始まります」「こんな予算が付きました」と、市民に対して事後報告をするばかりで、過程がわからないものがほとんどです。そうなると、役所は何もやってないので、もっと早くやれ、と思われてしまうんですよね。そこで今芦屋市では、過程の発信をどこまでやれるかにこだわっています。過程の発信にはリスクも伴うため慎重になる必要がありますが、試行錯誤しながら挑戦しています。

### | 若くして市長になることの意義

**東** 私は28歳で当時の全国最年少市長に、高島さんは26歳で最年少市長になりました。若いからこそ、長い目で見た施策を打ちやすいというメリットがある一方、生きている間に自分の推進した政策の成果があらわれるため、ある意味「裁きを受ける」とも言えますよね。高島さんは、若くして市長になるメリットをどのようにお考えですか？

**高島** 東さんの言ってくださった通りですが、あえて付け加えるとすれば、市長が若いからこそ市民が気負わず話をしてくれるという点は大きなメリット

だと思います。60代の市長だと、若い世代は話しかけにくいと感じるかもしれません。ですが私はまだ20代。同世代の社会人はもちろん、高校生も10歳しか歳が変わらないので、気軽に話してもらえます。60~70代の方も孫のような感覚で声をかけてくださるので、対話の最初のハードルは低いはずです。それは大きな強みだと思っています。

**東** 知識や経験が足りないのはデメリットになりますが、ここまで話してきたように、対話を通して様々な人に補ってもらえるという役割分担もできますよね。実際に市長を経験してみて感じるやりがいはありますか？

**高島** 市民との対話を通して、暮らしにおける課題はまだまだたくさんあると実感しています。市長としてそれを解決していくことで社会が変わり、暮らしが変わると「行政との対話には意味があった」と市民の皆さんにも思っていただけるのではないかでしょうか。市民は公的なサービスの受け手であるとともに、支え手でもあります。自分で市長を選び、予算をどうするか議論する議員も選べる。自ら意思を示すことで市を変えていけると市民の方に実感していただけたことが、基礎自治体の長としてのやりがいだと感じています。

**東** いかに市民の見えないところで世の中が動いているか。なぜ朝ゴミを出したら無くなるのか、なぜ蛇口をひねればきれいな水が出るのか。そういう仕



組みがここまでわかる仕事はほかにないですよね。私は「市民の暮らしを守り切る」というやりがいこそ、唯一無二だと感じています。

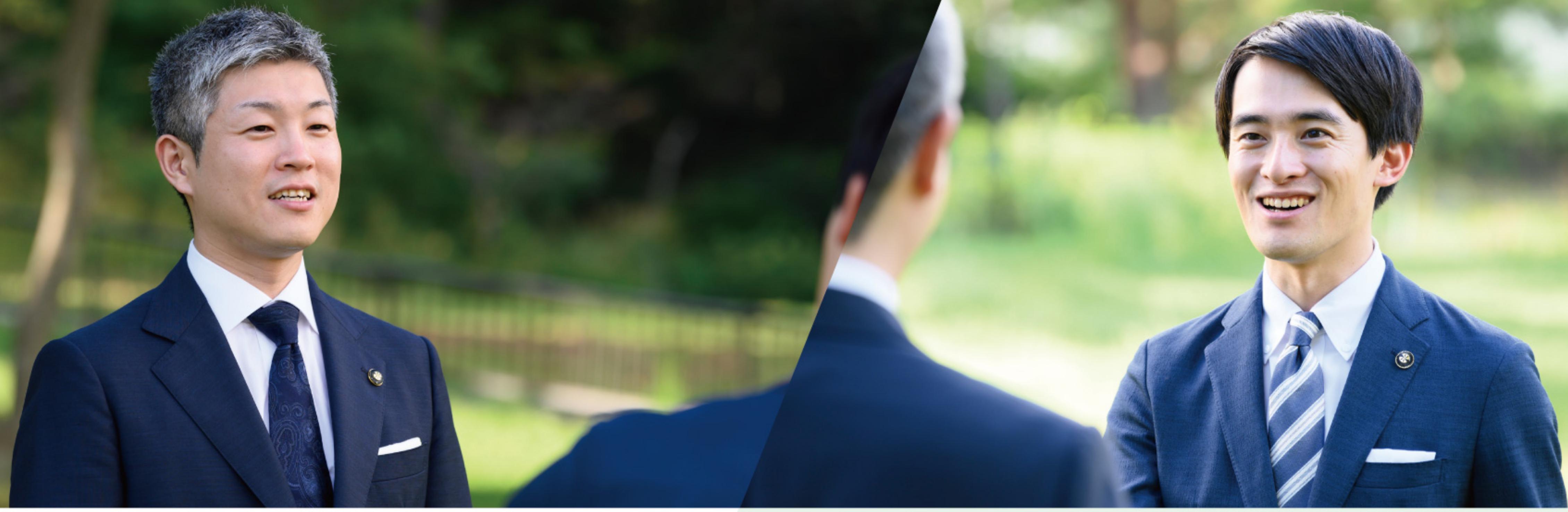
**高島** 本当にその通りですね。見えにくい点をどんどん市民の皆さんに発信するというのも、市長にとって非常に大切な役割のひとつだと考えています。

### | 人口減少時代における 自治体の未来

**東** 人口減少によって担い手が少なくなっている今、かつては“誰かに手伝っていただいてできていたもの”が継続できなくなっています。そのかじ取りをするために、従来の枠組みを変えていくことが、これからの中長としてのやりがいだと感じていますが、現在、芦屋市が挑戦していることを教えてください。

**高島** 人口減少に対しては、「緩和」と「適応」という二つの視点から施策を考えています。「緩和」とは、いかに人口減少を食い止めるか。芦屋市は、10代未満と30~40代の転入が多い市です。良い教育を受けて芦屋市から羽ばたき、自分が子育てをする世代になった時に芦屋に帰ってくる…それが今の芦屋市の戦略です。「適応」としては、今後も地域のコミュニティを守っていくためにどう変わっていくか。地域のコミュニティは面倒くさいもの、やや





こしいものと捉えられがちですから、ちょっとやつてみようかなと思っていただける仕組み作りが必要だと考えています。最近市内のとある自治体で、自治会長のバトンタッチがありました。自治会長を20年務めた方からバトンを受け継いだのは、小学生のお子さんがいるお母さん。なぜ上手くいったかというと、バトンタッチをした側もそばで支え続ける仕組みを作れたからです。すべてに口出しをするのではなく、そばで見守り、困っていたら手を差し伸べる。自治会の話ですから行政が一つひとつ関わるわけではありませんが、そのように、地域のコミュニティが維持できる環境を支えることは行政としてできることの一つです。

東 世代が変わる、リーダーが変わる、そういう時に難しいのが引き継ぎですよね。先代の自治会長さんがどのような姿勢で支えるかによって、その先のコミュニティの在り方も大きく変わるものだと思います。いま課題として挙がっている担い手不足は、あえて厳しい言い方をすれば、同じ方がずっと担って

きた結果として生じたものです。常にリーダーが入れ替わったり、新たな方がコミュニティに参画したりする流れがあれば、開かれたコミュニティとなり、担い手の確保に繋がります。ただ、人間は変化を恐れるのも事実です。その不安を拭うのが、我々リーダーの大切な仕事だと思っています。

高島 同時に、“人がやる良さ”を残しながら、効率化できる部分はどんどん効率化を進めていくことも重要だと感じています。たとえば芦屋市の放課後子ども教室事業「キッズスクエア」では従来、保険料等を現金で集めていました。それに対して、現場からキャッシュレス化を進めようと声が上がり、Web申込・キャッシュレス支払いに変わりました。小さな変革が「市長が言ったから」ではなく、「みんなが楽になるから」と現場のリーダー主導でどんどん進んでいくのは嬉しいですよね。

東 四條畷市でも、情報政策課が「あなたの課のDXを応援します」というメッセージを庁内に掛け、各課ごとの主体的な変化を促しています。

「これをやりなさい」ではなく、「やりたい課があつたら支援します」。すると、自分ごと感（オーナーシップ）が課の中に生まれ、前に進んでいく。まだまだ至らない点もありますが、こうした市役所に変わってきつつあることを嬉しく思っています。

### リーダーがバトンタッチする 重要性

高島 若いと改革を求められがちですが、私は「トップダウンで改革しない」部分も大事だと思っています。例えば芦屋市では、部や課などの縦割りではなく、横串でチームを作り、自分の所属する課以外の仕事のDX化を図るプロジェクトを推進しています。市長の私が指示したわけではなく、現場から声があがり、現場主導で変革が進んでいるんです。改革というと、トップダウンでバーンと変えるイメージがありますよね。ですが、先ほどの事例のように、現場から「こっちの方がいいんじゃない」と声があ

がるのを待ち、それを応援できるような体制作りも同時に重要だと考えています。

東 「改革」と「改革しない」どちらも必要ですが、だからこそ一人の人間が長く市長を続けることには限界があると考えています。私は二期目から、いま高島さんがおっしゃったような「現場がオーナーシップを持つ」「現場から自発的に」という手法を取りました。しかし、芦屋と異なり四條畷は財政が厳しかったので、一期目は行財政改革を成し遂げるため、トップダウンで改革を進めました。その時の改革について、未だに不満を持っておられる市民の方もいると思います。財政が良くなつたから色々な取組みをやっていこうと急に言われても、感情的なしこりを拭えないのも事実。だからこそ、僕らの任期が「4年」であることに意味がある。市長として、市民の皆さんに約束した改革を果たせば、先ほどの「適応」の話のように、自らは退いて次の良い取組みができる環境づくりを担う。四條畷がさらに発展していくために、僕はサポート側にまわるタイミング

にきたと判断し、後継者の全国公募という取組みを行いました。最後に、若くして選挙活動を経験した視点から、これから市政を志す方へのメッセージをお願いします。

**高島** 私は市長しか経験していませんが、これほど素晴らしい仕事はないと思っています。本当にこの仕事をやらせてもらっていることに感謝していますし、この仕事を選んで良かったと思っています。もちろん、うまくいかないこともあります。しかしそれも含めて、自分が目指した社会に一步ずつ進んでいる感覚はあるので、同じように市長を志す人がいれば、まずは「やりたい」という気持ちを大切にしてもらえたなら嬉しいです。その上で大切なのは、市民をとにかく信じ切ることなのではないかと思っています。「これを言ったら反対されるかな」、「言ってもどうせわかってもらえない」と思つてしまいがちですが、きちんと伝えたらきちんと返ってくるんだと本気で思えた1年半でした。市長を志す方は、自分と市民を信じて前に進んでもらえたら嬉しいなと思っています。

**東** 私は8年前、本気で「四條畷市はこういう改革をすべきだ」と市民の皆さんに伝えました。いまだに当時を覚えていて、「東さんはあのときこう言っていたよね」と声をかけてくれる方がいます。8年も前の言葉なのに、です。それだけ本気で思いを伝えれば、市民の方々の心にも残る。確かに何かを信じるということには、裏切られるのではという怖さやリスクが必ず伴います。でも、リスクはあって当然です。人事や予算という大きな権限を与えられる市長という仕事が、リスクなしにできるはずがない。裏切られるリスクを享受したうえで挑戦し、本気で訴え、信じた先にこの仕事があるからこそ、「やりがいがある」と心から言えるんだと思います。

**高島** 本当にその通りですね。私もますます精進します。本日はありがとうございました。

### 高島 嶺輔

たかしまりょうすけ

1997年大阪府生まれ。灘中学校・灘高等学校を卒業後、東京大学に進学。その後ハーバード大学に進み、2022年に同大学卒業。大学時代には、学生の海外留学を支援するNPOの理事長を務め、芦屋市企画部政策推進課でのインターンシップも経験する。2023年4月の芦屋市長選挙で、当時史上最年少となる26歳で当選。現在は「対話を中心としたまちづくり」や「公立小中学校の学びの質向上」の実現に向けてまい進中。

自分と市民を信じて  
前に進んでもらえたら  
嬉しいなと思っています。



本気で思いを伝えれば、  
市民の方々の心にも残る。

対談の様子はYouTubeから  
全編ご視聴いただけます。



前編

後編

## 実行した政策

- 特集 新型コロナ・物価高騰への対応 — 34  
コラム4 商品券は、なぜ全市民対象だったの? ..... 37

- 分野1 誰もが安心して暮らせるまちへ — 38  
コラム5 古いごみ焼却施設はどうなったの? ..... 40  
コラム6 介護保険制度が変わったの? ..... 44

分野2 今よりもっと暮らしやすいまちへ — 45

コラム7 市職員の女性管理職比率は? ..... 48

コラム8 四條畷市が国を動かしたって本当? ..... 52

分野3 子育て・教育のまちへ ..... 53

コラム9 子育て支援は充実してるの? ..... 56

コラム10 小中学校の環境整備は進んでいるの? ..... 61

分野4 魅力と活気に満ちたまちへ ..... 62

コラム11 市民の意識はどう変わっているの? ..... 67

コラム12 公共施設の再編はどうなっているの? ..... 70

## 特集 新型コロナへの対応

市独自施策

## 施設でのPCR検査の実施



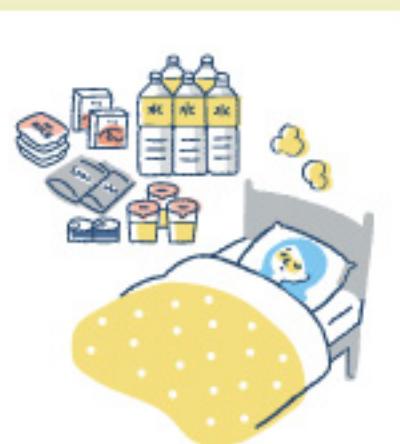
高齢者、障がい者、子どもを対象とした施設の感染拡大を防止するため、当該施設に感染者が発生した場合、大阪府の行政検査に該当しなかった方で検査を希望する方を対象に、市独自でPCR検査を実施しました。

## ワンコインPCR検査会場の開設



市民や事業者の皆さんに感染拡大防止に取り組んでいただいているなか、安心して社会経済活動へ参加できるように支援するため、市独自にワンコインPCR検査会場を設置。延べ5,308人の方にご利用いただきました。

## 自宅療養者への生活支援



国や大阪府が軽症・無症状者を自宅療養とすることへ方針転換したことにより、自宅療養者となった市民の皆さんに、療養や健康観察に安心して専念できるように、食料品等の支援を実施。延べ11,688名にご利用いただきました。

## 特集 新型コロナへの対応

市独自施策

## 円滑な予防接種の推進



市民の皆さまが円滑に予防接種の予約ができる環境整備と、各医療機関における予約対応への負担軽減のため、プロジェクトチームが一括して予約に対応する体制を確立。医師会のご協力もあり、大阪府内で最も円滑に予防接種が進んだ自治体の1つとなりました。

## 医療・福祉・衛生事業への感謝金



感染リスクと隣り合わせのなか、人々の生活にとって必要な事業に従事された皆さんに対して、初の緊急事態宣言時に1人50,000円、5類への移行時に1人30,000円の感謝金を支給し、感謝の意を表しました。

## 保育園等の改修整備支援



民間保育施設に対して、非接触型の蛇口設置といった感染症対策のための改修や必要な設備の整備等に補助を行うとともに、公立園においても非接触蛇口等の改修を実施しました。

## 分野1 誰もが安心して暮らせるまちへ

防災

## 避難所用備品・備蓄品の拡充



プライバシーを確保するための間仕切り(パーティション)をはじめ、防災用ベッドやマット、発電機や炊き出しセットなどの避難所用備品を大幅に拡充するとともに、アルファ化米や保存水、簡易トイレや哺乳瓶などの災害備蓄品の計画的整備を進めてきました。

## 木造住宅への耐震診断制度の拡充



これまで実施してきた既存の民間木造住宅における耐震診断等の費用への一部補助制度について、これまでの診断、改修に対する補助から、除外する場合も対象となるよう、制度を拡充しました。

## 障がい・難病のある人のための防災ブックの発行



障がいや難病のある人へ災害時に必要な情報を提供し、災害対策の意識をもつていただくとともに、災害時にはご自身で必要な判断ができることで、日々の生活を安心して過ごしていくだけるように、防災ブックを作成しました。

## 分野1 誰もが安心して暮らせるまちへ

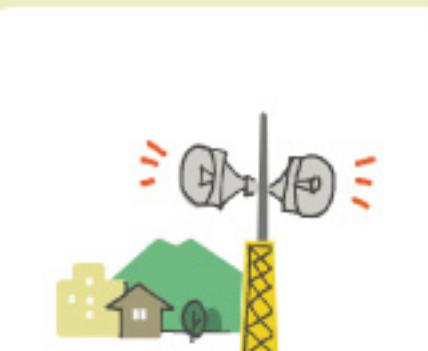
防災・防犯

## 災害情報システムの導入



災害発生時における被害状況や避難所開設状況など、職員間で共有すべき情報や市民に提供すべき情報を、迅速かつ効率的に収集・伝達するため、GIS機能を活用した災害情報システムを新たに導入しました。

## 防災行政無線の機能強化



災害時における市民への情報伝達手段の1つである防災行政無線について、市内における音声未到達エリアを可能な限りなくすべく、屋外子局の新設とスピーカーの交換を行うとともに、アナログ方式からデジタル方式の無線設備へと移行いたしました。

## 防犯指針の策定



本市にはこれまで防犯に関する取組をまとめた指針がありませんでした。市全体での防犯意識高揚をめざし、防犯カメラや防犯灯の拡充をはじめ、見守りなどの防犯対策について、市や地域、事業者の役割を明確化すべく、防犯指針を策定しました。

## 分野1 誰もが安心して暮らせるまちへ

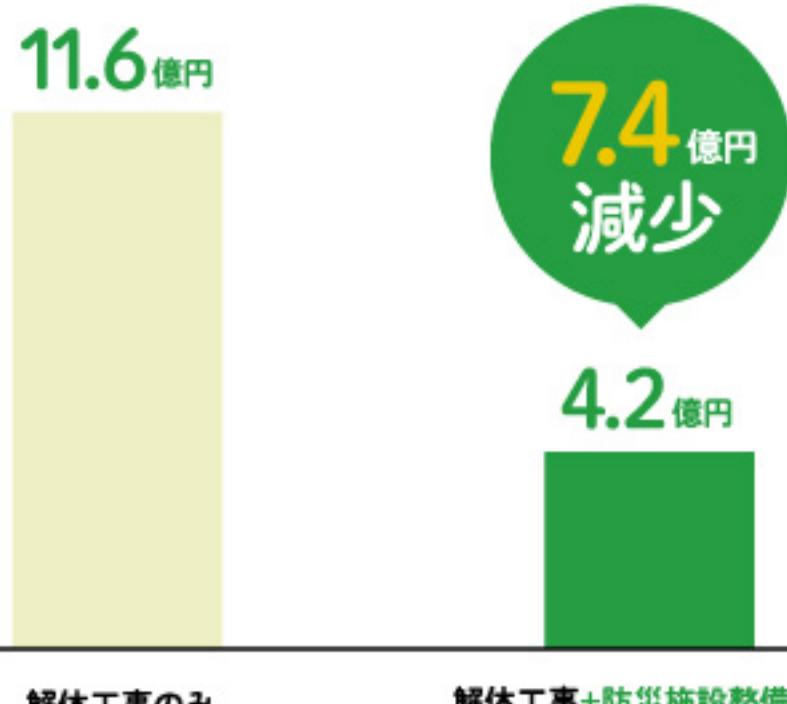
福祉

## コラム5

## 古いごみ焼却施設はどうなったの？

防災拠点へと転用し  
解体工事費を大幅削減

## 概算工事費



解体工事のみ 解体工事+防災施設整備工事

参照:清滝ごみ焼却施設の跡地検討報告書

平成30年より、新ごみ処理施設(交野市私市地区)の運転を開始したことから、昭和42年より約50年にわたり稼働してきたごみ焼却施設(四條畷市清滝地区)を解体する必要がありました。当初の計画では単なる解体で多大な工事費用が想定されていましたが、他市事例を徹底的に調査し、国の支援制度を最大限活用することで、大幅な工事費用の削減を実現するとともに、跡地についても防災拠点(災害時用臨時ヘリポート)として利用できることになりました。

## 重層的支援体制の構築



これまで「地域生活困窮丸ごと支援会議」を設置し、住民の複合的な課題の解決に向け取り組んできましたが、分野を超えた様々な機関との連携を強化し、多様な地域生活課題を包括的に受け止めるべく、丸ごと支援会議を基軸とした重層的支援体制を整備しています。

## 地域活動支援センターの設置



障がいのある人が、地域において自立した日常生活や社会生活を営むことができるよう、創作的活動や生産活動、社会交流の促進を図るとともに、日常生活等に必要な情報の提供を行う地域活動支援センター事業を開始しました。

## 子ども手話事業の実施



平成31年4月に施行した「四條畷市心をつなぐ手話言語条例」の理念に基づき、小さなこころから手話に触れることによって、聞こえないことへの理解や手話が言語であるとの認識が深まるように、手話に触れる機会を提供する子ども手話事業を実施しています。

## 分野1 誰もが安心して暮らせるまちへ

健康・医療

## 健康寿命延伸の推進



令和3年に策定した健康寿命延伸の基本方針に基づき、各種啓発やイベントを実施するとともに、地域ごとのお散歩マップの作成・提供、専門職による健康確認・相談、交流の場として「なわて健康ラボ」を開催するなど、市民が主体的に健康づくりに取り組めるような環境整備を進めています。

## 健診・がん検診の受診率向上への取組



特定健診やがん検診において、携帯電話のSMS（ショートメッセージサービス）を利用した勧奨・再勧奨を実施し、若年層の受診率向上を図るとともに、一部がん検診において、集団検診会場や医療機関に出向くことなく受診できる郵送受診を新たに追加し、受診者の利便性向上につなげています。

## 休日診療の充実



これまで市で休日診療所を設置し、休日や年末年始に小児内科の初期救急診療を実施していましたが、令和6年10月より市内2次救急医療機関へと機能を移行することで、検査、治療、薬剤処方の充実に加え、小児と保護者の同時受診、救急搬送が必要な際の迅速な対応などが可能となりました。

## 分野1 誰もが安心して暮らせるまちへ

人権・相談

## 人権行政基本方針の改訂



従来の人権行政基本方針が、「障害者差別解消法」「部落差別解消法」「ヘイトスピーチ解消法」、いわゆる人権三法の施行前に策定されていたことから、それら法律の趣旨や内容を盛り込んだ基本方針へと見直しを行いました。

## 公共施設での生理用品の提供



経済的な困窮などにより、生理用品が買えない女性がみられるなか、不安を抱える女性に対して市内各施設や各小中学校で必要な生理用品を配付のうえ、相談へと繋げることで、生活困窮者の実態把握とともに相談者への支援を実施しました。

## 健康相談24の開設



健康・医療・介護・出産・育児・メンタルヘルスなどに関する悩みに、医師・保健師・看護師等の専門職が対応できるように、「なわて健康相談24」を新たに開設し、24時間365日体制で市民からの相談を受け付けています。

## コラム6

## 介護保険制度が変わったの?

**単独運営により  
介護保険料の上昇を抑制**

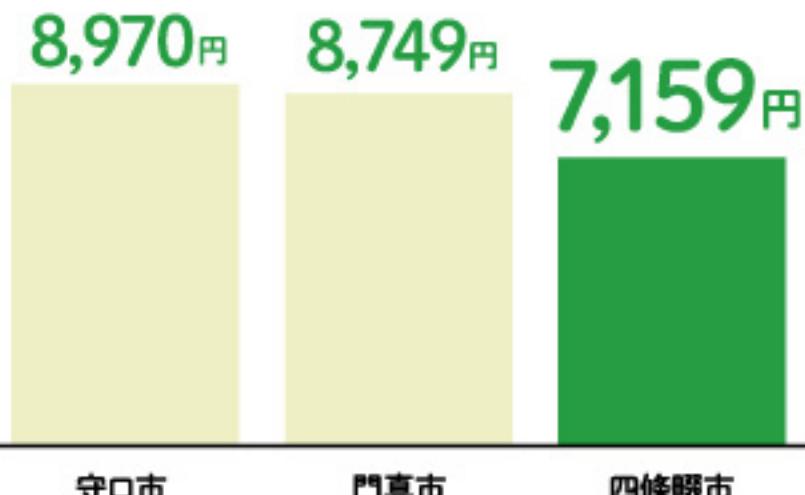
介護保険料基準額(第1号被保険者)

**第8期**  
(令和3~5年度)

**6,748円**

(守口市・門真市・四條畷市で共通)

解散後



参照:大阪府ホームページ

守口市、門真市、四條畷市は、平成11年にくすのき広域連合を設立し、介護保険事業の共同運営を行ってきました。設立当初は、規模を活かした安定的なサービスを提供しておりましたが、国の制度改正により、各市が地域に密着した取り組みが求められるなかで、広域連合であるが故の支障が生じてまいりました。そのため、構成3市で協議を重ね、令和5年度末で広域連合を発展的に解散することを決定しました。

解散に伴い、各市ごとに介護保険事業を運営することとなり、四條畷市の特性に応じた地域包括ケアシステムを発展させることができるように加え、保険料も各市ごとの計算となった結果、四條畷市としては保険料の上昇を大きく抑えることできています。

## 分野2 今よりもっと暮らしやすいまちへ

道路

### 国道旧170号の拡幅



大阪府が所管する東中野の交差点から南の道路については、大型バスが行き交うにもかかわらず、狭い道路となっています。過去からの勉強会などの結果、大阪府が拡幅を決定し、現在は地権者や沿道住民の方々との交渉のうえ、対象となる物件の補償費等の価格提示や買収契約を進めています。

### 危険な踏切への対策



国の踏切道改良促進法に危険な踏切として指定されたJR学研都市線の後戸川踏切は、市の通学路交通安全プログラムに位置付けていることから、児童生徒が安全・安心に通学できるように、踏切の拡幅工事を実施しました。

### 逢阪生駒口線の舗装改良



国道163号と大阪生駒線を結ぶ市道逢阪生駒口線は、本市の主要な道路ですが、舗装の劣化が激しくなっていました。そのため、道路利用者の安全性を向上させるとともに、緊急交通路としての機能を確保するため、新たに国の補助金を確保し、4年度から道路改良に取り組んでいます。

## 分野2 今よりもっと暮らしやすいまちへ

道路・住宅

## 通学路の安全確保



子ども達が安全に通学できるように、国からの交付金を活用し、歩車分離された歩道の設置、水路への蓋かけ等による歩道幅の確保、グリーンベルトの設置などを進めています。

## 狭い道路の拡幅に向けた補助制度の創設



幅員の狭い生活道路を広げていくため、建築基準法により道路後退が義務付けられる土地を対象に、測量や分筆など道路後退にかかる費用の一部を補助する制度を創設しました。

## 空き家を活用した移住定住の推進



これまで社会課題とのみ認識していた空き家を新たな資源としてとらえ、子育て世代等の定住や移住に繋げるべく、空き家のリフォームに対する補助制度を創設しました。

## 分野2 今よりもっと暮らしやすいまちへ

細やかな支援

## ごみの排出が困難な方への支援の導入



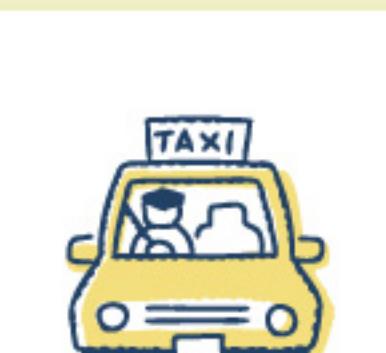
収集車が入れない地域や集合住宅などでは、集積場に出されたごみを収集するステーション方式で収集していますが、要介護認定等を受けているなど、一定の理由により、集積場へのごみの排出が困難となっている方を対象に、自宅前での収集を行う「ふれあい収集」制度を導入しました。

## 外出が困難な方への貸出図書配達の導入



自力で図書館へ出向くことが困難な方々に、本を届け生涯を通して読書を楽しんでいただくことで、生活を豊かに送る一助としていただけるように、貸出図書の配達事業を開始しました。

## 高齢者や妊産婦などの方への移動支援



日常生活において、高齢者や妊産婦などの方々で外出することに不安や抵抗を感じている方に対して、自宅から駅等へ拠点までのタクシー料金を市が一部負担する「おでかけサポートタクシー」制度を新たに導入しました。

## 分野2 今よりもっと暮らしやすいまちへ

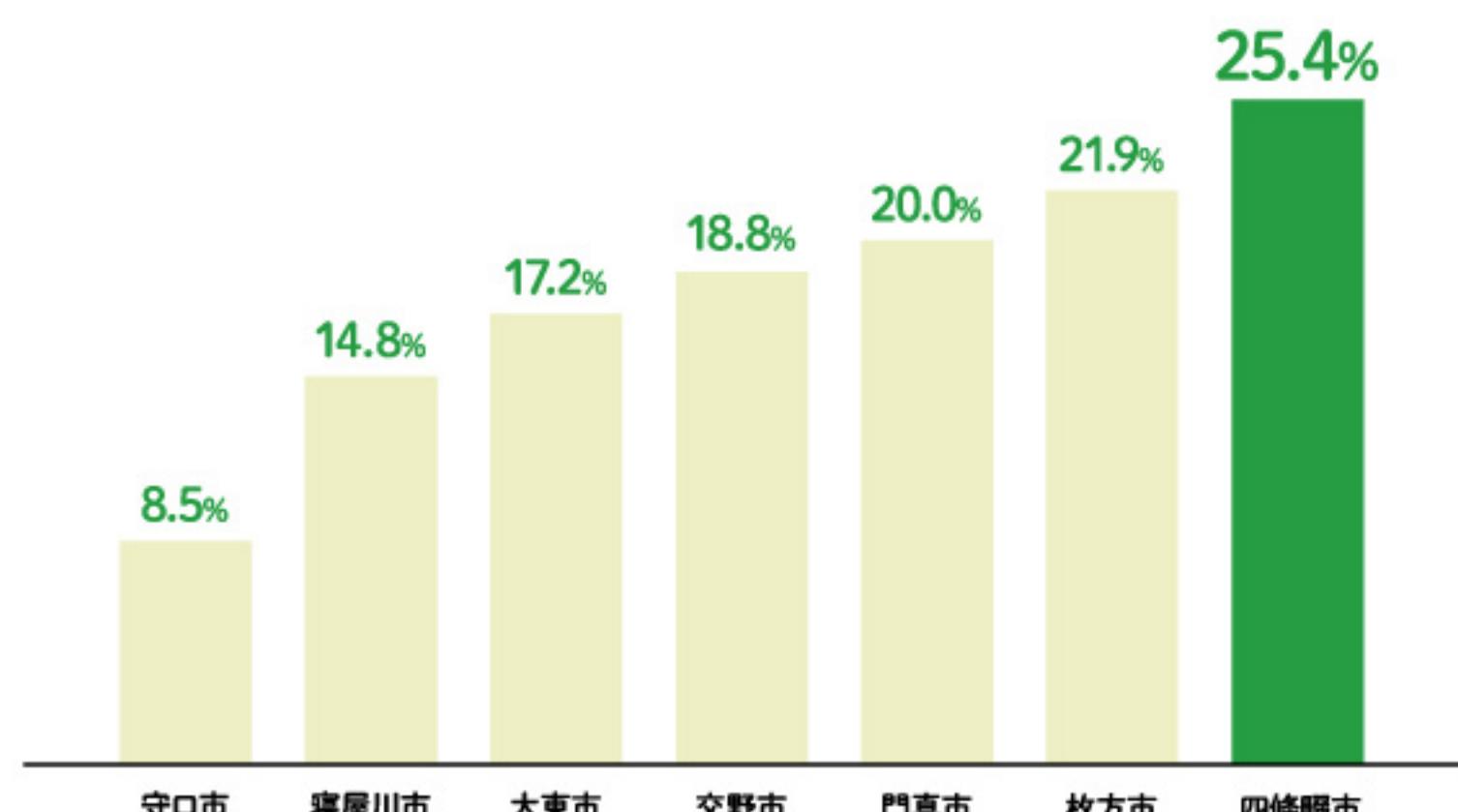
生活環境

## コラム7

## 市職員の女性管理職比率は?

## 北河内で最高比率

管理職に占める女性の割合 (R5.4.1時点)



参照:市区町村女性参画状況見える化マップ(内閣府)

市役所全体として、一定割合で女性職員がいるにもかかわらず、8年前に市長に就任した際には、副市長はもちろんのこと、部長級や次長級にも全く女性がいない組織でした。その後、市政運営を行うなかで、適正な人事評価に基づく公平な人事異動の結果、現在では部長級や次長級にも複数の女性職員が配属されています。

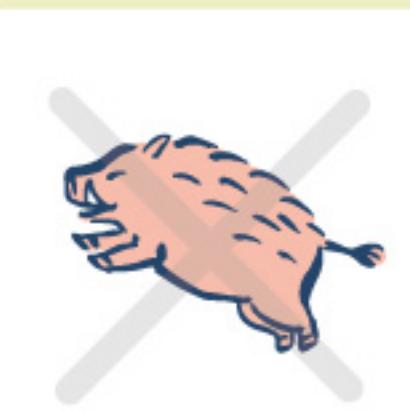
なお、公開されている女性管理職比率では、北河内ではトップ、大阪府内43市町村中においても4番目の高さとなっています。

## フードドライブ制度の導入



お米や乾麺をはじめ、缶詰やお菓子、レトルト食品など、ご家庭で余っている食品を持ち寄っていただき、それらを必要とする施設や団体等に寄付する「フードドライブ」制度を新たに導入しました。

## イノシシなど有害鳥獣対策の推進



山間部でのイノシシ等による農作物への被害を軽減するため、「鳥獣被害防止計画」を策定のうえ、獣友会をはじめとする関係機関との連携を強化するとともに、檻の設置場所の拡大を進めています。

## 所有者不明猫の不妊・去勢手術費補助金の創設



良好な生活環境を保全し、不幸な命を増やさないために、所有者のいない猫の繁殖を抑制すべく、地域で繁殖の抑制を目的とした活動に取り組む団体への支援の一環として、所有者不明猫に対する不妊・去勢手術費への補助制度を、新たに創設しました。

## 分野2 今よりもっと暮らしやすいまちへ

デジタル

## コンビニでの証明書交付の拡充



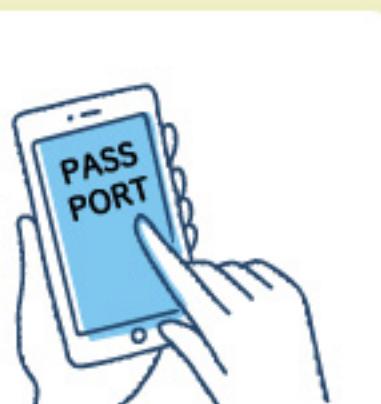
マイナンバーカードをお持ちの方の利便性向上のため、全国のコンビニで発行できる証明書の対象を、住民票の写し、印鑑登録証明書、住民税決定証明と順次拡大してきており、2024年12月半ばからは、戸籍謄本など戸籍に関する証明書も取得できるようになります。

## 行政手続きのオンライン化の推進



市民の皆さんができるように、全庁統一的な電子申請システムを導入し、手続きのオンライン化を進めています。5年度末で約41%がオンライン化できており、8年度末までにオンライン申請が可能な手続きのオンライン化率を100%とする予定です。

## パスポート更新のオンライン化



仕事等、様々な事情で窓口に来ることが困難な方への対応や、市民の利便性向上のため、行政手続きのオンライン化を進める一環として、大阪府と連携のもと、パスポート申請の電子化を導入しました。

## 分野2 今よりもっと暮らしやすいまちへ

デジタル

## 「書かない窓口」の導入



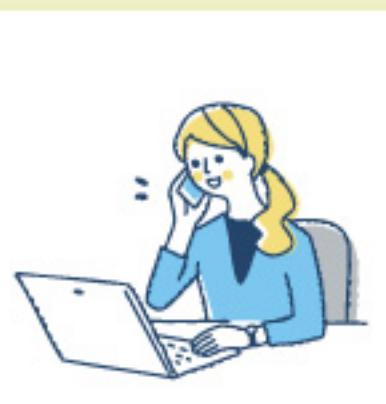
来庁者の行政手続きにおける利用環境を電子化することで、手続き時間の短縮をめざすとともに、タブレット等により質問に答えていけば申請書等ができる仕組みの導入に加え、マイナンバーカードをかざすことで申請書を記載することなく証明書を交付できる「書かない窓口」を新たに導入しました。

## 窓口支払いのキャッシュレス化



市民の利便性向上のため、全国で初めて市役所の窓口におけるキャッシュレス支払いを導入した四條畷市。使用できる窓口や電子マネーの種類を拡大し、今では主要な窓口支払いと多くの種類の電子マネーにて対応できるようになっています。

## 電子契約・電子入札の推進



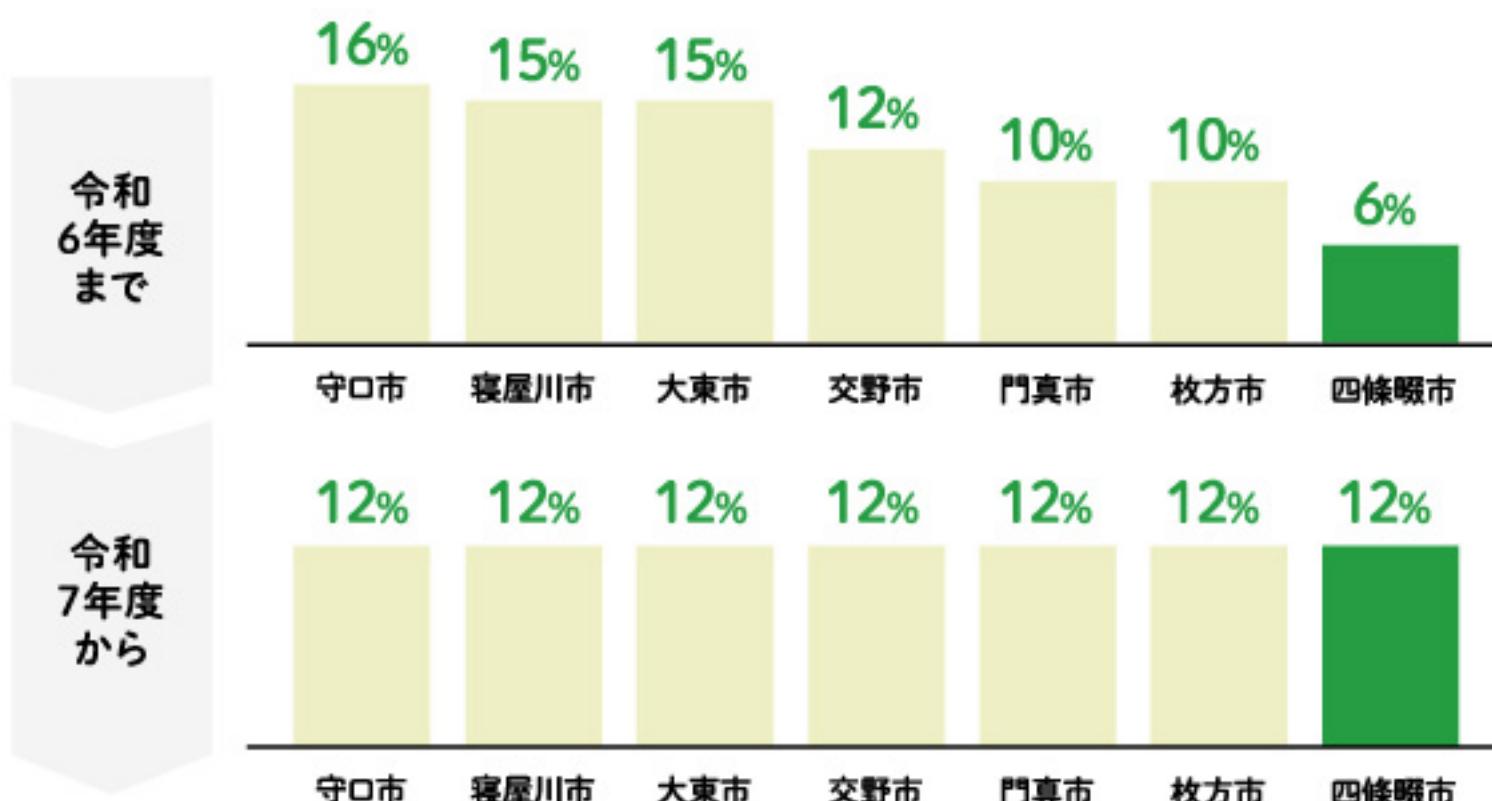
事業者と市役所双方の省力化や効率化のため、電子契約システムや電子見積サービスの導入を行うとともに、事業者と契約事務担当者との接触機会の減少、遠隔地を含めた多様な事業者の参加可能性の確保、入札参加事業者数の増加などに向け、入札手続きのデジタル化を進めています。

## コラム8

## 四條畷市が国を動かしたって本当?

### 粘り強い要望を重ね 地域格差の解消へ

地域手当の支給割合



参照:令和6年度人事院勧告

公務員をはじめ、保育や介護、障がい福祉などの施設で働く方々の給料に多大な影響を及ぼす地域手当。四條畷市においては、これまで国により不当に低く設定されていました。そのため、市長就任直後から国への要望を開始し、人事課の職員が中心となって関西圏や関東圏で同様の課題を抱える自治体を巻き込みながら、計15自治体による要望活動へと発展させるとともに、議員の皆さまや大阪府など多くの方々のお力添えをいただいた結果、令和6年度に、国が地域手当を都道府県で統一する方針を示しました。これにより、近隣市との不当な地域格差が解消されると同時に、四條畷市の地域手当が大きく向上することとなり、保育士などの方々の待遇が改善されることになりました。

## 分野3 子育て・教育のまちへ

## 子育て支援

## 待機児童対策の推進



待機児童の解消と保育士等の働きやすい環境づくりに向け、市内の民間保育施設に対し、奨学金の返済支援や、産休や年休の取得支援の補助金を交付するとともに、勤続10年以上の保育士等に対し、処遇改善として市独自で月1万円を支給しています。

## 子育て世帯への訪問支援の実施



親族等のサポートや他の公的なヘルパーサービス等の利用が困難で、体調不良等の様々な事情で家事育児等に不安を抱える妊娠中から子育て中(0歳から18歳未満)のご家庭に、市と契約した事業所からヘルパーを派遣し、家事や育児の一部を援助する制度を導入しました。

## 図書館での託児サービスの導入



図書館ではこれまで乳幼児と本を結ぶイベントを開催していましたが、保護者が子どものための本選びや自身の読書の時間を確保できるように、乳幼児向けイベント付き託児サービスを新たに開始しました。

## 分野3 子育て・教育のまちへ

子育て支援

## 新生児聴覚検査への助成



新生児期に聴覚検査を行うことで、早期の療育に至る確率が20倍以上となることから、すべての新生児が聴覚検査を受診し、確実に早期療育につながるように、新生児聴覚検査費用の一部助成を実施しています。

## 弱視の早期発見のための設備導入



50人に1人にあるとされている子どもの弱視は、早期に適切な治療を受けることで、視力の回復に繋がるため、屈折異常の早期発見を可能とするフォトスクリーナーを新たに導入し、医療受診勧奨の対象児が適切な治療を受けられるよう支援しています。

## 母子手帳アプリの機能拡充



子育て世帯の利便性向上のため、大阪府で初めて、保護者が子どもの予防接種に関するスケジュール管理・予診票記入・接種記録をアプリで完結できる環境を整備しました。

## 分野3 子育て・教育のまちへ

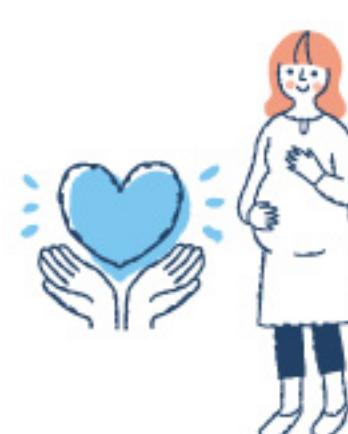
子育て支援

## ひとり親家庭への生活支援



ひとり親家庭等の安定した生活に向け、ひとり親の父または母などが支援や給付を受ける際の行政手続きなどを円滑に進めることができ難な場合に、同行して手続きなどを支援する制度を新たに導入しました。

## 低所得妊婦への初回産科受診料支援



低所得の妊婦の方が経済的負担を理由に、妊娠の診断を受けるための初回産科受診を控えることが無いように、初回の産科受診料を助成することで経済的負担の軽減を図り、その後の妊婦の状況を継続的に把握し、妊娠期からの必要な支援につなげています。

## 多胎妊婦への妊婦健診支援



多胎児を妊娠した妊婦は、単体妊娠の場合より多くの妊婦健診の受診が推奨され、受診に伴う経済的負担が大きくなることから、通常14回の妊婦健康診査から追加で受診した健診の費用の助成を開始しました。

## コラム9

## 子育て支援は充実してるの?

### 子育ての各段階の支援を大幅に拡充

#### ● 第2子の保育料無償化(所得制限なし)

認可保育施設に通う保育料について、国制度により3~5歳児及び第3子以降は所得制限なく無償化されておりますが、0~2歳児は住民税非課税世帯を除き、所得に応じて支払っていただています。そこで、複数の就学前のお子さんを育てる家庭を応援するため、第2子の保育料の無償化を、令和5年度から市独自で実施しています。

#### ● 第2子以降の学校給食費の無償化(所得制限なし)

令和4年度に、物価高騰に対する一時的措置として学校給食費の無償化を実施しましたが、子育て支援の充実という観点から、複数の就学児童生徒がいる世帯の負担軽減を図るべく、第2子以降の学校給食費の無償化を、5年度から市独自で実施しています。

#### ● 18歳までの子ども医療費助成の拡充(所得制限なし)

過去から子育て世帯の方々より多くの声が寄せられていた子ども医療費助成の拡充について、これまでの15歳までから、さらに安心して医療の受診ができる環境づくりを整えるべく、令和5年度より18歳まで対象を拡充しました。

四條畷市の将来を担うすべての子どもたちに、健やかな育ちの環境を提供したいという思いで、市长就任以降、子育て施策の充実に注力してまいりました。また、財政の健全化を達成したことで、令和5年度よりこれまで以上に思い切った子育て支援の拡充を実現しました。

## 分野3 子育て・教育のまちへ

## 教育

### AI型ドリルの導入



児童生徒の個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実をはじめ、自ら学ぶ力の育成のため、先駆的にAI型ドリル教材を導入しました。導入したAI型ドリルは、児童生徒の解答状況に応じて問題が提示され、自身で選択しながら学びを進めていくことが可能なシステムとなっています。

### 学校図書館の充実



学校図書館への支援員の配置は、読書の習慣付けや学習への意欲向上など、児童生徒のみならず、保護者や学校からもその効果の声が多く届いていたことから、支援員を増員のうえ全ての小中学校に配置し、学校図書機能の拡充を図りました。

### 専門インストラクターによる水泳学習



先行実施している学校において、児童や保護者、教職員からの高評価に加え、担任とインストラクターの連携による専門性の高い指導と安全な水泳授業の実現が確認できたことから、児童の泳力と体力の向上のため、全小学校において水泳学習の民間委託を本格的導入しました。

## 分野3 子育て・教育のまちへ

教育

## 保育の質向上への取組



公立保育施設において、自分で考え行動できる主体性や、コミュニケーション能力、自己肯定感を育むため、遊びや生活、身近な自然の中で、子どもたちが興味や関心を持っていることをテーマに学びを深めるプロジェクト型保育を実施しています。

## 特別教育支援員の拡充



これまでも、きめ細やかな指導支援体制を整えるため、各学校に人材を配置してまいりましたが、多様な教育的ニーズに応えるべく、通級指導教室における人員や教材などの支援の充実を進めています。

## 校内教育支援員の拡充

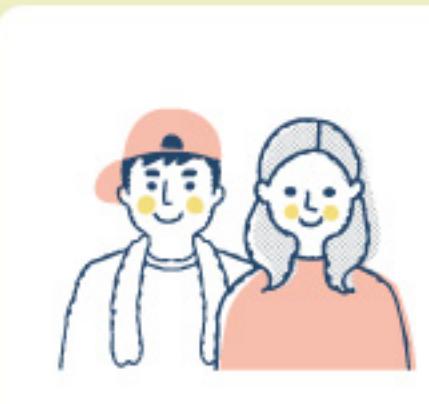


市単独の校内教育支援員を新たに配置し、学校には登校できるものの教室に入りにくいなどの不安感がある児童生徒を受け入れる「校内教育支援ルーム」の体制を充実するとともに、学校に登校できない児童生徒を受け入れる「フリールームなわて」の相談員の活動時間を拡充しています。

## 分野3 子育て・教育のまちへ

教育

## 部活動支援員の配置



部活動の専門的な指導と教員の負担軽減を目的に、中学校における部活動指導員の増員を進めています。

## ふれあい教室(学童保育)の待機児童対策



共働き世帯が増加する一方で、指導員の確保が困難となり、待機児童が発生していたことから、令和7年度より民間委託の導入を決定しました。これにより、指導員等の人員確保を見込むことができるため、安定的な開室につながります。

## 安定した学校給食の提供



学校給食費の公会計化をはじめ、老朽化を迎える厨房機器等の計画的な更新を進めるとともに、調理と配達業務の一体化を実施したことにより、これまで以上に安定した学校給食の提供が可能となりました。

## 分野3 子育て・教育のまちへ

施設

## 公立保育施設の改修

昭和50年度に建築され、老朽化が進行していた岡部保育園舎について、外壁補修、屋上防水、天井・床等の内装、照明のLED化等のほか、インターホン設備・空調設備・厨房器具・換気設備、手洗い等の更新等を実施しました。



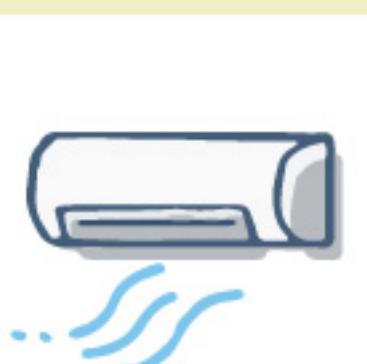
## 小中学校の改修

老朽化が進行していた忍ヶ丘小学校において、校舎棟や屋内運動場の大規模改修を行うとともに、複数の小学校においてマンホールトイレやかまどベンチなどの防災機能強化を実施しました。



## 小中学校の体育館・教室への空調整備

避難所としての安全性を高めるとともに、夏場でも安心してスポーツに取り組めるように、すべての小中学校の体育館への空調設備を整備しました。また、普通教室や特別教室への空調整備も実施しました。

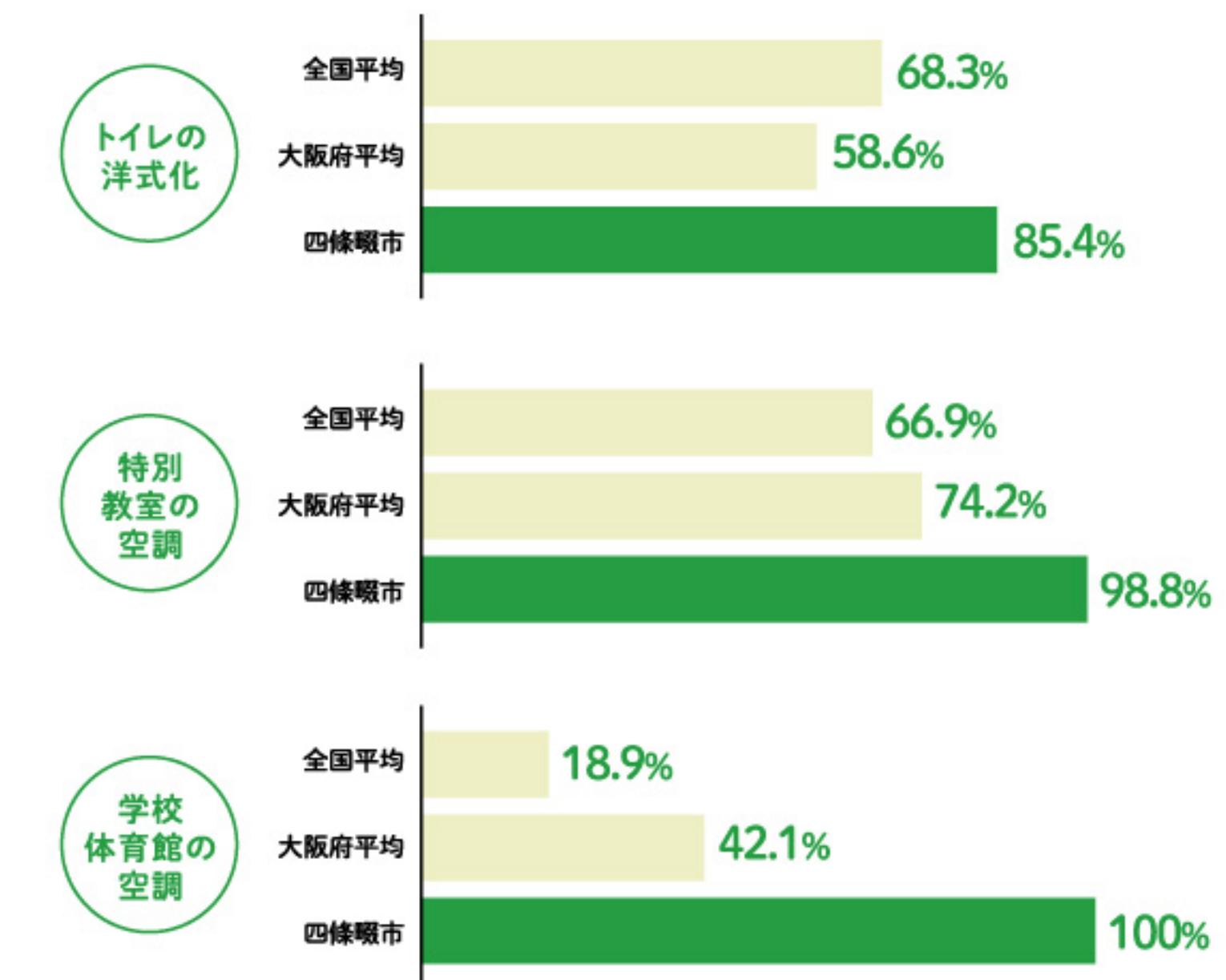


コラム10

## 小中学校の環境整備は進んでいるの？

全国の中でも先駆けた  
教育環境整備を実施

各小中学校設備の整備率(R5.9.1時点)



参照:令和6年度四條畷市未来教育会議資料

## 分野4 魅力と活気に満ちたまちへ

## スポーツ・文化

## スポーツフェスティバルの開催



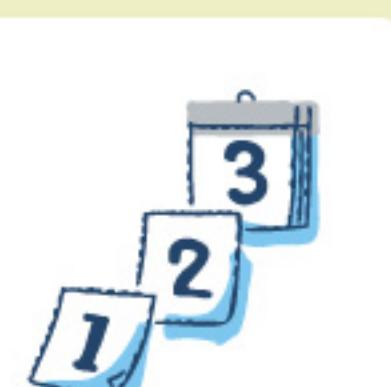
大学や各種スポーツ団体の協力のもと、従来の市民体育祭を新たに「スポーツフェスティバル」として、子どもから高齢者まで誰もが一日を通じてスポーツや健康測定等を体験できるイベントへリニューアルしました。

## 市民文化祭の活性化



日頃の文化活動を発表とともに、鑑賞する機会でもある市民文化祭について、より多くの市民のみなさまにご参加いただけるように、開催日数をはじめ、展示出品数や舞台出演枠の拡充を行いました。

## 市民ホールの予約開始日の前倒し

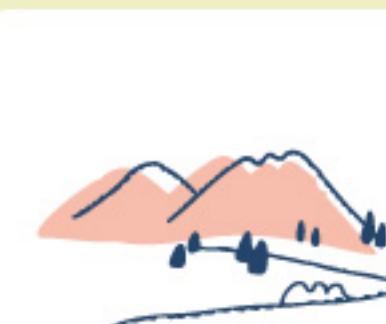


市民総合センターの市民ホールについては、これまで半年前からの申請受付をしていましたが、各団体から年間スケジュールを立てづらいとの意見を受け、1年前から受付を開始できるように変更しました。

## 分野4 魅力と活気に満ちたまちへ

## 歴史・文化

## 国史跡飯盛城跡に関する取組



大東市とともに進めてきた取組が実を結び、本市初の国史跡に指定された飯盛城跡。保存・活用を進める指針となる保存活用計画を策定のうえ、文化庁、大阪府及び専門委員会の助言指導を受けながら、具体的な整備の方向性を示す整備基本計画の策定を進めています。

## 市史(民俗編)の刊行



四條畷の歴史を調査、研究した成果を、活字資料として残し、活用していただくことで郷土愛の育成へと繋げるため、考古編に引き続き、令和3年度末に四條畷市史(民俗編)を刊行しました。

## ボランティアガイド制度の新設



飯盛城跡をはじめとする歴史的遺産などの地域資源を活用した施策の一環として、市民やボランティア団体と協働でのハイキング事業などを実施すべく、新たにボランティアガイド制度を創設しました。

**分野4 魅力と活気に満ちたまちへ**

社会活動

**団体活動への支援制度の整備**

協働のまちづくりを推進すべく、地域課題の解決や地域活性化に向け、自立的に取り組む団体等に対する補助制度を構築するとともに、団体活動の周知活動や手続きに関して行政が支援する協力事業制度を新設しました。

**大人の学び直しの推進**

国や大阪府、様々な教育機関と連携し、意欲ある市民の「大人の学び直し」の支援として、学び直しに関する情報の取得や相談ができる仕組みの構築、学び直しの費用に対する補助制度の創設、継続的なフォローアップの実施などの一連の施策を開始しました。

**スマホ教室の開催**

誰一人取り残されることない社会をめざし、高齢者の方を中心にデジタルの活用を躊躇されている方々に対して、大学や企業等と連携し、公民館などでこれまで100回以上にわたりスマートフォンの使い方教室を実施しています。

**分野4 魅力と活気に満ちたまちへ**

田原地域

**圃場整備の推進**

下田原地域において、地域が主体となって農地の区画や農業用の道路・水路等の整備を行う圃場整備の事業化に向け、地域の合意形成のもと22ヘクタールに及ぶ区域において事業計画を定め、国との協議を進めるとともに、事業着手に必要となる関連法に基づく手続きを進めています。

**農業経営への支援**

意欲ある農業者により設立された農業法人が中心となり、府内では非常に珍しい小麦栽培に挑戦していることから、市内事業者への小麦の販売や、子どもたちに対する農業体験の機会の提供など、魅力ある農業・農空間をはぐくみ次世代に継承する取組に支援を行っています。

**下水道処理区の統合**

持続可能な下水処理を実現すべく、国からの交付金を最大限に活用しながら、多額の更新費用が見込まれる田原下水処理場を汚水ポンプ場に変更のうえ、田原地域の生活排水を西部市街地に送水するための下水道管を敷設しました。

## 分野4 魅力と活気に満ちたまちへ

田原活性化

## 自動運転車(田原コネクトカート)の導入



田原地域内における移動手段の課題解消に向け、地域のボランティアチーム「たわらコネクトカート」の皆さまのご協力のもと、高精度3次元地図の技術を活用した拠点間を結ぶ定時の自動運転車と、地域と拠点を結ぶデマンド交通の運用を開始しました。

## 未利用地を活用したイベント開催



田原地域の活性化に向け、地域の皆さまのご協力のもと、未利用地を活用した実証実験イベント「たわらマルシェ」を開催し、田原の魅力を市内外に発信しています。

## 田原地域の新たなまちづくり



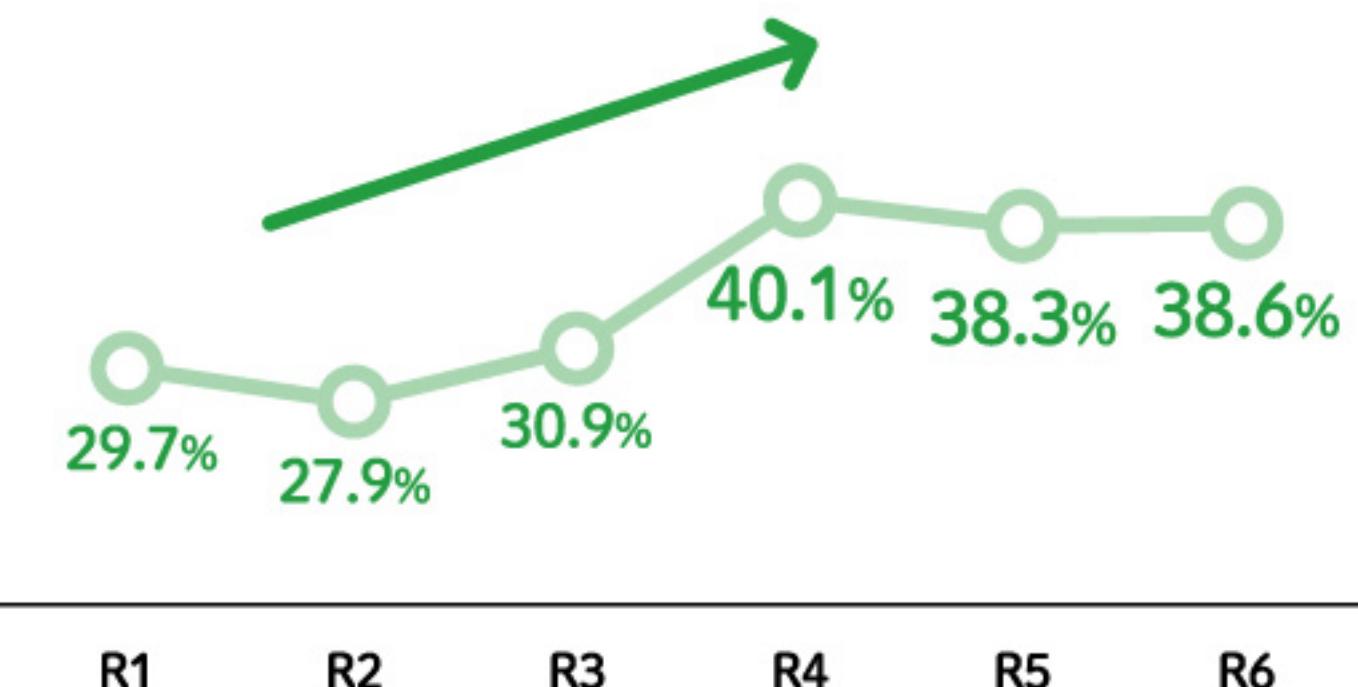
田原台の「まちびらき」から30年以上にわたり有効活用されていなかった土地に関して、市民・民間企業・行政が連携のもと、地域資源を活かした魅力ある田原地域のまちづくりを行うべく、アンケートや民間事業者へのヒアリング、住民参画のワークショップを重ねています。

## コラム11

## 市民の意識はどう変わっているの？

「四條畷市への移住を勧めたい」という市民の割合が増加傾向

市民意識調査での肯定的回答の割合



参照:市民意識調査(四條畷市)

市民の皆さまのニーズを的確に把握し、今後の市政運営の参考とするため、令和元年度から始めた市民意識調査。その中で「市外の知人が引っ越し先を検討している場合、四條畷市に移り住むことを勧めたいと思いますか」という質問を設定しています。意識調査を始めた当初は、「とてもそう思う」「ややそう思う」を合わせた肯定的回答が30%を下回っていましたが、少しずつ上昇し、今では40%近くとなっています。市としては令和9年度までの目標として「50%」を掲げていますが、今後も引き続き、市民の皆さんとの対話を通じて、市民の皆さんとともにまちづくりを進めていくことで、この目標が達成できると信じています。

## 分野4 魅力と活気に満ちたまちへ

産業・広報



## なわて事業者チャレンジ支援制度

地域経済の好循環に向け、中小企業や個人事業主の事業活動を後押しすべく、商工会との連携のもと、既存事業者には新たな設備導入等に対して最大1,000万円の支援、新規創業者には起業時に必要となる初期費用に対して最大200万円の支援など、市独自の大規模な支援制度を構築しました。



## 市公式LINEの機能拡充

市公式LINEについては、2万人以上の方に友達登録いただいていることから、欲しい情報を選んで受け取れる機能や、ゴミ出しのサポート機能、簡単に情報が検索できるメニュー ボタンの表示などを、機能を大きく拡充しました。



## 広報誌の全面リニューアル

より質の高い広報に取り組むことで、四條畷の魅力を効果的に伝え、市民の暮らしをより豊かにすべく、令和4年度に市広報誌を全面リニューアルしました。その後に実施したアンケート結果では、「読みやすくなった」との評価を53.1%の方からいただきました。

## 分野4 魅力と活気に満ちたまちへ

公共施設

## 市民活動センター体育館の改修



築40年以上経過し、老朽化が進行していた市民活動センター 体育館について、耐震化をはじめ、外壁・内装・屋根・便所などを改修するとともに、照明のLED化や空調の新設を行いました。



## くすの木公園の整備

自然豊かな都市環境づくりに向け、西部地域における公園整備の第一歩として位置付けた旧くすの木園跡地については、地元地区や周辺住民方々とのワークショップを経て、周遊園路や健康遊具、芝生の整備など多世代が親しみをもって利 用でき、防災機能をも兼ね備えた公園へと整備いたしました。



## 公園施設更新指針に基づく整備

市内の公園施設について、老朽化に伴う更新時期が一斉に到来している状況のため、安全性を確保するとともに、修繕や更新に要する費用の平準化を図るべく、公園施設更新指 針を策定し、劣化等の進んだ公園施設に優先順位をつけ、順 に改修等を行っています。

## コラム12

# 公共施設の再編はどうなっているの？



**公共施設の再編は、すべての自治体が  
避けては通れない課題です。**

高度経済成長期に、一斉に整備された公共施設への対応は、全国の自治体が抱える課題です。市民の利便性向上はもとより、施設の安全性の確保や将来の財政負担を鑑み、老朽化した施設や非耐震施設を、複合・集約化して行くことが必要です。

**市長就任以降、市民や議会との議論を  
着実に積み重ねてきました。**

平成28年12月に、市が公共施設総合管理計画を策定した直後に、市長に就任しました。就任後、各施設の劣化度診断を行ったうえで、市民ワークショップの開催（計5回）、市民と市長の意見交換会（計25回）、市民や団体代表、学識などで構成する公共施設再編検討会の開催（計8回）、議会での特別委員会（計15回）などの議論を経て、現在の案に至っています。これらの議論に加え、地域の皆さまとの対話会を148回実施しており、市民の意見を着実に積み重ねてたどり着いた案と考えています。

**安全性の確保と財政負担の抑制を念頭に、  
魅力あるまちづくりに資する案となっています。**

主要な施設である市役所や総合センターの立地は変えることなく、南中学校跡地に避難所を兼ねた複合施設を整備することで、市内全ての非耐震施設の早期解消と、持続可能な財政運営を実現できる計画となっています。その際、多世代の交流はもとより、これまで本市になかったボール遊びができるような大きな広場を備えた公園なども整備する予定です。

**今後は早期に整備を進めるため、  
再編を担う組織を強化する予定です。**

2024年11月14日～12月13日までの間、公共施設の再編に関する計画（個別施設計画）のパブリックコメントの手続きが行われており、2024年12月末には計画の改訂を予定しています。これ以上いたずらに議論を長引かせることは、建設資材や人件費の高騰にも繋がりかねず、そうなれば市民の皆さまの税負担が大きくなってしまいます。そのため、12月に改訂される計画に基づき、早期に整備を実行するため、施設再編を担う体制を強化する予定としています。





# DIALOGUE

対談

## 全国公募で民間から就任 前副市長とともに 振り返る4年間

東市長 × 林前副市長

### 職員・市民の目線に立つ姿勢が 評価され副市長に

東 8年前、私が四條畷市長をめざすにあたり、しっかり改革を進めていくためには背中を預けられる副市長が必要と考えていました。部長級の職員の方々は行政を知り抜いているなか、選挙で選ばれた私は市民の皆さんとの対話を中心に行いつつ、副市長にはあえてこれまでの副市長とは異なる感覚を持つ方に担っていただくことで、市役所内に健全な対話が生まれて組織改善をしていくのでは?と思い公募を行ったのが、林さんの入職のきっかけとなっていきます。率直に、林さんはなぜ副市長の公募に手を挙げてくださったのでしょうか?

林 前職で、全国の住宅マーケットを分析し住民に住宅情報をお届けする仕事をしていました。全国津々浦々を回ると、元気なまちとそうでないまちがあるのがわかります。そして、行政への不満を耳にする機会も多くありました。地域が活性化するためにどうしたらいいのかを深く考えている折に、東市長がテレビに出ていたのを拝見しました。地域に飛び込んで何かを一緒に変えていきたい! そう思い応募したんですよね。

東 あまり事例のない取組みだったので、どのくらいの方が応募してくださいのかわからなかったのですが、ふたを開けてみると1,700人もの方が手を挙げてくれていました。最終面接のときは、職員の中で四條畷市民の者を中心に多くの職員による面接が

ありましたか? 覚えていますか?

林 もちろんです。入る部屋を間違えたかな?と思ふくらい多くの面接官が、ひな壇のように座っていてカメラも回っていました。印象的だったのは、「私たちに寄り添ってくれますか?」という質問が多かったこと。たとえば若手職員の方は「災害が起きたとき、あなたには0歳のお子さんがいるのに、副市長としての責務を果たせますか?」と聞かれました。この人たちは副市長に明確に求めているものがあり、それが私にできるかを答えてほしいんだと感じました。それで、「この場に自分が入ったらどうあるべきなのか」「彼らにどんな気持ちや立ち位置を求められているのか」を中心に答えていった記憶があります。

東 副市長として選ばせていただいた決め手はまさにそこでした。面接官の質問に対して、常に相手の目線に立って返答していました。他の候補者の中には、ご自身の実績や他の会社での改革のアピールをされる方多かったですですが、林さんは常に職員・市民の目線に立って答えていて、若手・中堅職員を中心

に支持されました。

林 4年の任期を終えた時にも、そのような声を多くいただきました。職員や市民の声をわかるうとしてくれた——、そんなコメントが多かったです。

### 子育てをしているからこそ保育の 制度改革に素早く切り始めた

東 当時の林さんは、0歳のお子さんと東京に住んでいました。お二人で四條畷市に移住し働くというのは、たとえ副市長の職ではなくても大変だと思いますが、いかがでしたか?

林 「何を考えているんだ」というお声も当初はいただきました。ですが、自治体の職員はその地に根差すのが基本。その地域に対しての奉仕が重要だと考えていたので、移住にためらいはありませんでした。また、当時の私は子育てそのものが初めてだったので、それゆえに新鮮な視点で見えるものがあると考えていました。新米ママとして暮らす上での気づきを、四條畷市にどんどん還元したいという思いが強かったです。そういう意味で、その時期の移住は地域の方々の暮らしと密接につながるために意味のあるものだったと思っています。

東 副市長に就任してから、素早く保育の制度改革に切り込んでいったのをよく覚えています。当時は、保育所の入園の受付順が先着順で、明らかに働くご家庭向けではない制度になっていました。申込の日は、朝から行列ができるほどでした。

林 そうでしたね。保育園申し込みが先着順だったので、朝の早い時間から市役所前に並んでおられる。その列を成す多くの方が高齢者。入園する子のおじいちゃん、おばあちゃんです。しかし、誰も並べない世帯ほど頼れる人がおらず、保育の必要性があるかもしれない。小さなところに気づけるのが、私がいる価値だと考えていました。

東 まったく小さな話ではないと思っています。林さんが切り込んでくれなかつたら、悪気無く、今もその慣習が続いている可能性が非常に高い。意思決定する者の中に、いろんな年齢・経験の人がいたからこそ気づき、変わられた部分だと思っています。他



に、おむつの持ち帰り制度も変えていきましたね。

林 当時の四條畷市では、子どもの健康状態の把握のためにおむつを持ち帰る決まりがありました。でも、仕事に疲れた状態で迎えに来て、たくさんのものを持ち帰って、おむつを確認する。そんな母親と父親の肩に子育てのすべてがのしかかるような制度でいいのかと思いました。小さくとも、一つひとつの負荷を失くしていくことが、「まちとして一緒に子育てをしていくぞ」という姿勢になると思ったんです。ちょっとした変化を丁寧に生みだしていく、それ自体が福祉の根幹であると、身をもって感じていく日々でした。

東 どんな大きな改革をしても、それに直面している方々の困りごとを解決しないければ意味を成しません。林さんは「小さく着手して大きく」というお話をよくされていたと思いますが、その一環として、職員との対話にも力を入れ、課題の発見に注力してくださっていたと思いますが、着任して最初に感じた印象を教えてもらえますか？

林 民間出身の人間として入ったので、本当にいろいろと感じました。具体的な話を挙げると、紙でのやり取りが多く、それが、データとして語らない慣習の素地を作っているように感じていました。状況を即座に分析し、結果を出し、客観的に語る文化がなかったように見えたんです。また、職員に「なんのためにやっているの？」と聞いても明快な答えが出てこない。私の前職はそのあたりを非常に厳しく問われる企業だったため、随分と違うなと感じていました。自身の経験と目の前の環境に深いギャップがある中で、それを市長の求めているスピード感と改革の深さでどのように進めていけるのか。最初は「これは大変だ！」と思っていました。

### 民間からの視点を生かして 作った転換点

東 林さんと始めた「運営者会議」は、市役所運営の転換点となりましたね。従来あった幹部会議は、市長・副市長・教育長・部長級と揃った中で、あらかたセリフ回しが決まったものを形として議事録に残していましたが、それを変えてきました。

林 会議に議論がなかったように見えたからです。過去3年分の議事録を読んでも、いつどこでトップの人たちが議論をしているのかが見えてこなかつた。そこで、着任して1ヶ月半ほどで「部長級と同じ視点で市の経営について議論できる場を作ってほしい」と市長にお願いして、運営者会議を発足させました。

東 それまでは、「よその部でやっている仕事には口を出すな」という暗黙の不文律があったように感じます。でもよく考えると、部と部が連携してやったほうがいい仕事もたくさんある。従来の幹部会議はそれに気づけない構造になっていました。

林 例えば、2年後に市内に大きなマンションが建つとします。開発許可などを出す部署はどこにどの程度の規模のマンションができるかをかなり早い時点で知っていますが、保育を担当する課には伝わっていかなかったりする。マンションに入居する子どもを受け入れる素地（保育園や学童など）は足りてい





らう点が第一関門でした。

東 従来も部長級の皆さんは「部長マニフェスト」と呼ばれる、施策実行の宣言を持っていました。一方で、部の運営や、一般職員にどのように働いてほしいかという方針は持っていました。そもそも、それが「仕事」という意識が薄かったと思っています。どんな部にしたいかという理念を持ってもらうことが、まずは非常に重要だと考えました。

林 実は最初に「あなたが作りたい10年後のまちを書いてください」と部長の皆さんにお願いしても、書くのが難しかったんです。これまで、そういうビジョンを書くのは市長や議員の皆さんの役目だったから、と。自分たちは誰かが描いた未来を具現化する姿勢でこられた職員に、やりたいことを聞く難しさ、そして、彼らのやりたいことと市長のやりたいことを結び付けるハードルの高さには悩み続けました。

東 それでも結果的に職員の四條畷市に対する愛着や思い入れは高まって行き、定量的な指標にも表れるようになりました。これまでの「市長が描く姿を実行する」という姿勢はとてもありがたかったのですが、ある意味それは思考停止におちいる危険もあった。今は、私からほとんど何も伝えなくても「部

としてはこうしていきたい」「来年はこうしたい」と、運営者議会などで話してくれます。急に変わったわけではなく、林さんが部長の皆さんと何度も何度も話をすると中で、このまちを自分でどうしていきたいか考える習慣がついたから、というのが大きいと思っています。

林 前職では「お前は何がしたいんだ?」「ビジョンはなんなんだ?」と日常的に聞かれていたので、それが当たり前だと思っていました。部長職の皆さんからすると、それはあえて「考えないようにしていた」部分だったので、10年後の姿と言われても書けなかつたのかもしれません。ですが、「なってほしくない未来は?」と聞くと、すごくたくさん出てきて。子どもの笑顔が無いまちは嫌。高齢者の方が不安でたたずんでいるようなまちはさせません...などたくさん出ました。私は「それ!」と相槌をうちながら、皆さんと共有して一つひとつを繰り返して広げていく。その過程で、市長がめざす未来と職員個人の思いがつながっていくんです。そのような動きを通して、彼らの気持ちがわかっていき、彼らの目線も「外から黒船に乗ってやってきた副市長」ではなく、ともに作り直す、編みなおす人だ、と変わっていく。

着任から半年から1年ほどで、組織の変化が起きていたように思います。

## 4年間の成果と、これからの四條畷市に寄せる期待

東 愛着や「ありたい姿」の話をしましたが、一方で林さんは公募で来られて、四條畷市に元から愛着があるわけではありませんでしたよね。なぜ日の当たりにくい、苦労も多いこの仕事に4年間集中できたのでしょうか。

林 純粋に、面白かったです。スピード高く変化を生みだし、それを市民の皆さんと喜べる。まちが変わるのを一番近いところで支えながら作れるのが醍醐味でした。私たちが調整した何かがまちの変化につながるんだ、市民の暮らしの質に直結するんだ、というのが2年目からは特に身に迫ってくるようになりました、それらに貢献できている面白さを強く感じていましたね。

東 入ってこられたときと、4年を経て退任されるとき、どのような違い・変化を感じられましたか?

林 市長と職員の皆さんとの頑張りのおかげでさまざまな成果が出ましたが、何よりも大きいなと思うの

は、それを自分たちで誇れる組織になった点だと思います。施策の意味、そして当事者意識を持つて成果を出したのが自分たちだと理解されている。

東 例えば、地域内移動の課題解消を目的とした自動運転車の導入の取り組みについて、視察に来てくださった方に「市長が頑張ってきたんですね」と声をかけていただく機会があります。ですが実は、何度も住民の皆さんと話し合い、このまちの課題は何かを探し、交通が見つかり、職員として何をすべきか?を考える、という順番でした。「交通の課題を解消しよう!」とトップダウンで行う方法もありました。ですが、住民の皆さんと取り組み、次なる挑戦を常に考えたおかげで、加速度的に前に進めたのだと思っています。林さんから見て、4年間を通して難しかった点はありますか?

林 なんでも難しかったのですが、中でも難しかったのは、「これをやりたい!」とアイディアが出た際、反対する人に同じ方向を向いてもらうことでしょうか。ですが、ひとつ成功事例が生まれ、発案者が自信を持って語れるようになると、周囲も「こうやって変革が生まれるのだ」とわかってきて、連鎖的に新たなものができていく。最初の火を起こす難

**5年後、10年後にはまた違う魅力を備えた**

**四條畷市になつてゐるはずです。**



ちょっとした変化を生み出していく、  
それが福祉の根幹

しさはありましたが、生まれだすと早くなる感覚も同時に持てました。

**東** 市長がトップダウンで進めれば、「どうやるか」の議論に終始します。一方、部長が新しい挑戦を提案するからこそ、対等な立場で議論が起き、火花が散る。議論を通して、「どういうまちを作りたいか」を深く考える機会につながっていましたね。

**林** そのような自分の挑戦や苦労がまちの変化や市民の暮らしに直結するのがなにより面白かったです。そして、四條畷市の職員は底抜けに人がいい。他の自治体の職員の方と話した際に「四條畷市の方にヒアリングしたら、その業務の何が本質なのかを丁寧に教えてくれます。伝えたいという思いがあるんですね」と言われました。伝えたくなるのは、自分がやっている仕事に誇りがあるから。だからこそ、資料を送り、電話で長々と話し、会いに行く。そんな仕事を通してまちへの愛着が上がっていくものなのだと思います。

**東** 副市長を離れ、まだ良くしていけると感じる点はありますか？

**林** 世界は広いので、現状の四條畷市に満足せずに、他の自治体の事例を見に行ってほしいと思っています。全国には約1,700の自治体があり、さまざまな面白い事例が生まれています。多くの場所に飛び出していってほしいなと。

**東** おっしゃる通り、多くの改革を進めてきた中で、自発的に提案し、自分の仕事に誇りを持って前に進むという流れができてきました。逆に言えば、今の四條畷市はさらに挑戦できる環境にあると思っています。このタイミングで次の世代にバトンをつなごうと思っているのは、もしも私が4年後に退任すると、いま柱として市政を支えている部長級の皆さんのがほとんどが定年退職を迎てしまい、組織として不安定になってしまうからです。今のタイミングであれば、新しいリーダーがきても、自走力のある部長級の皆さんと熱のこもった議論を交わし、新たなリーダーが持つこれまでになかった強みを生かして前に進んでいっていただけるはず。四條畷がさらに発展していくには、今がバトンを託すに最も良

いタイミングと考え、市長退任を決断しました。在任期間内で財政の健全化が進み、今は新たな都市計画やまちづくりに向けて積極的に投資できる環境にありますから、四條畷市のさらなる飛躍に期待したいと思っています。林さんとして、四條畷市はこんなまちになっていけるのでは、というお考えはありますか？

**林** これからの四條畷市は、大阪や京都に働き行っていた人がリタイアし、地域に戻ってきて、「地域時間の総量」が増えていく場所です。行政が関わる時間の総量がどんどん膨れ上がっていきますから、暮らしを面白くする実験がさまざまできると思っています。私はアクティビティの数が多いほどまちへの愛着が高まると考えています。ですから、アクティビティの数を地域時間の総量とともに増やす、それが今の四條畷市にできることだと思っています。

**東** 最後に、バトンをつなぐ可能性のある方へ、四條畷市について、四條畷市の職員という仕事について、メッセージをお願いします。

**林** 四條畷市は、私のような外から来た人間を受け止めてくれる場所です。外から来たものと一緒にやっていく、という素地を整えてきたので、これまで以上にやりやすくもなっている。次のステージを一緒につくっていこうと思う方、それを面白いと考える方に入っていただくのは、四條畷市にとって非常に良いと思っています。

**東** 市民も、前に進み、よりよくなることを望んでいるはずです。新しい視点や強みを持ってまちを伸ばしていくければ、5年後、10年後にはまた違う魅力を備えた四條畷市になつてゐるはずです。一緒に四條畷市を盛り上げていけたらうれしいと思っています。林さん、本日はお時間をいただきありがとうございました。

林 有理 はやしゅうり

前 四條畷市副市長。2003年リクルートに入社、2009年『SUUMOマガジン』編集長に就任。2017年10月、全国公募を経て大阪府四條畷市の初の女性副市長に着任。働き方改革を柱とした前例主義に縛られない「日本一前向きな市役所」をめざして組織改革に取り組んだ。日経ウーマンオブザイヤー2020受賞。2021年9月、任期満了にて四條畷市副市長を退任。現在は、地域と人との関係の向上や、新たな官民連携の仕組みづくりに携わる。

対談の様子はYouTubeから  
全編ご視聴いただけます。



前編



後編



## なぜ、2期8年で退任し、後任を全国公募したのか

2024年9月25日、次期・四條畷市長候補を全国公募する発表をいたしました。2017年1月に初当選させていただいてから、2期8年。温かく応援してくださった市民の皆さん、四條畷市の未来のために時に厳しくご指摘をくださった議会の皆さん、そして、いつも頼もしく支えてくれた職員の皆さんおかげで、今まで至ることができました。この場をお借りして、これまで東修平にお力添えをいただきましたすべての皆さんに、心から感謝申し上げます。

本来であれば、お一人おひとりにお会いして、お礼とともに私の思いを直接お話ししたいのですが、叶いませんのでこちらでお伝えさせていただきます。長文となりますが、どうかご容赦ください。

### 8年前、市長選挙に出た理由

そもそも、なぜ8年前に市長選挙への出馬を決断したのか。その理由を端的に言い表すならば、「生まれ育った四條畷市の、危機的状況を打破したい」という思いからです。

緑豊かで閑静な住宅都市、四條畷。生まれてからずっと過ごしてきたこのまちが、暮らすにはとても良いところだと今も信じています。しかし、社会人として海外で勤くなか、父の病をきっかけに四條畷

市に戻る機会が増え、こうした声を耳にするようになりました。

「最近、四條畷市に活気が無い気がする」そこで、何気なく市の様々な統計情報を調べてみました。いま思えば、この時の行動が私の人生を大きく変えることになります。

調べて分かったことは、子どもを中心に現役世代の人口が近隣と比べて大きく減少しているという衝撃的な事実。そして、その原因を調査して分かったことは、過去に財政状況が大幅に悪化したことによ

り、長期間にわたり削減を主体とした財政運営が行われてきたということ。その結果、近隣市と比較して住民サービスが相対的に低下し、結果として何年にもわたり選ばれないまちになっているということでした。

しかし、驚いたのはそうした事実だけではありません。財政の悪化、住民サービスの低下、人口流出という負の流れにあるにもかかわらず、まもなく行われる市長選挙が現職の無投票再選になりそうだということも、様々な人への聞き取りから判明しました。

選挙は、4年に1度、市民の皆さんがまちの将来について考える貴重な機会です。市民が現状を知り、自分たちのまちをどうしたいのかを意思表示できる場が、無投票で無くなってしまうならない。何より、家族も住み、友達も住む、生まれ育ったこの四條畷市は、もっと住み良いまちになれるはずだ。

若さと無知ゆえか、こうした湧き上がる自身の思いを抑えることができなくなり、市長選挙への挑戦を決断するに至りました。

### 市長就任後の主な取組み

「新しい曇へ」をスローガンに掲げ、四條畷市長選挙に挑戦。現職と一騎打ちの戦いとなりましたが、多くの方々にご支援をいただき、何とか当選することができました。

そして2017年1月20日より、第5代四條畷市長として全身全霊で市政運営にあたる日々が始まります。

市長になってからは、負の流れを断ち切るために、様々な改革に取り組んでまいりました。そうしたなか、何よりも重視したのは市民の皆さんとの対話です。

しかし、どんなに市民の皆さん思いに向き合いたくても、財源がなければ何も実現することはできません。そのため、特に1期目については徹底した行財政改革を実行してまいりました。

一方、言うまでもなく、削るだけでは選ばれるまちにはなりません。行財政改革を断行しながら

も、同時に注力したのは、子育て支援策をはじめとする住みたい、住み続けたいと思っていただける魅力づくりです。

結果として、財政については31年ぶりの健全な財政状況を達成するとともに、人口については11年ぶりの社会増加を達成いたしました（詳細はP.1～をご覧ください）。



## | 2期8年で退任する理由

ここからが本題ですが、なぜ2期8年で退任するという決断に至ったのか。その理由を端的に言い表すならば、「生まれ育ったこの四條畷市を、さらに発展させたいから」というのがその答えになります。

2期目の折り返し頃には、市長就任時より強い決意で進めてきた行財政改革の成果が如実に現れ、四條畷市の財政はかつてないほどに健全化するまでに至っていました。また、並行して進めてきた子育て支援策も実を結び始め、人口の転入増加、とりわけ30代・子育て世代は連続した転入超過を達成するに至ります。

このような結果となりましたのは、私が掲げた「日本一前向きな市役所」という組織理念のもと、職務に尽力くださった職員の皆さんのおかげに他なりません。

また、市として様々な改革に取り組むなかで、四條畷市役所は人材が集まる市役所となってまいりました。全国で地方公務員のなり手不足が叫ばれるなか、2023年度における事務職の採用倍率は約150倍となっています（詳細はP.12～をご覧ください）。

こうしたなか、着任7年目を迎えた2023年度の市政運営方針において、私は市長としてある決断をしました。それは、長きにわたる削減を主体とした財政運営から、未来への投資を主眼とした市政運営

へと大きく舵を切ることです。そして、この転換こそが、初選挙時に市民の皆さんとお約束した「新しい瞬へ」の実現ではないだろうか。この頃から、そうした考えを抱くようになりました。

そこから、50年先、100年先の四條畷市が、いま以上に活気あるまちであるためにはどうすれば良いのだろうかと、深く考える日々が始まります。

そして、考えに考え抜いて私が出した結論は、四條畷市がこれらも継続的に発展していくためには、情熱と素質があるリーダーが一定期間で生まれる「流れ」をつくることでした。

権不十年という言葉があるように、同じ人が長く続けることで起きる弊害は、必ずあります。実際に、「無投票になるのでは」というお声をいただくことも増えてきていました。市民の皆さんからの評価と考えれば光栄なことではある一方で、「裸の王様になるのでは」という恐れがあるのも事実です。歴史上どんなに優れたリーダーも、長く続ける内に適切な自己認識を持てなくなり、晩節を汚している例は枚挙に暇がありません。

また、人には得手不得手があります。私が就任した時の四條畷市は、組織に大きな変革が必要な時期でした。そのため就任直後より、公募で選任した民間企業出身の副市長とともに、組織改革に注力してまいりました。その結果、今では市の主要な運営方針については、職員を中心に創り上げてきたものが



定まり、それらの方針をもとに職員が主体的に運営する状況に至っています。

そして現在、四條畷市は新たな魅力を創出していく段階に入りました。未来への投資を加速させる時期だからこそ、こうした取り組みに長けた方が四條畷市のリーダーを担う方が望ましいと考え、退任を決意しました。

寂しい思いが無いと言えば、嘘になります。それでも、四條畷市の未来を考えた際に、今回の判断が最良であると、私は信じています。

## | 人口減少時代における 自治体の未来

次に、ただの退任でも単なる後継指名でもなく、政治団体「四條畷市民の力」を立ち上げて、後任の市長候補を全国公募のうえ選出し、サポートするというプロジェクトになぜ至ったのか。その理由を端的に言うならば、「長期間にわたり、四條畷市が発展する土壌を作りたい」というのが私の想いになります。

約8年、市長を経験させていただくながで痛感したこと。それは、行政運営の長として、市長の持つ権限の大きさです。

よりふさわしい人物が選ばれる可能性を上げるにはどうすれば良いか。



実は、市長には立候補にあたり住居要件がありません。そもそも私も、大学生までは四條畷市に住んでおりましたが、大学院からは地元を離れており、立候補を表明する前はインドで働いていました。すなわち、いま私が知り得る人の中に、最良の候補がいるとは限らないということです。

民間企業とタッグを組み、なるべく多くの方に可能性をひらくことで、四條畷市にとってより良いリーダーが誕生する確率が高まるのではないかと考えました。

### 「選挙の壁」の打破

市長をめざすなかで、最も高いハードルである選挙。多くの人にとって、選挙はブラックボックス化されており、もし市長たり得る熱意と素質を持っていたとしても、挑戦することを諦めてしまう方がほとんどでしょう。実際、政治家の2世・3世の人や、特定政党の支援を受けている人と比べ、選挙に関する知識や資金面で、無所属の新人は圧倒的に不利な状況にあります。

そこで、政治団体「四條畷市民の力」により、立候補予定者の政治活動をサポートすることで、そうした不公平に立ち向かい、熱意と素質ある人物が挑戦できる環境を創りたいと考えました。

政治家の2世・3世であるかどうかは生まれながらなので変えることはできませんが、特定政党の支援を受ければ良いでるのはという方もいらっしゃるかもしれません。

しかし、市長は市に一人だけであり、全市民の代表者です。様々な政党を応援している市民がいるからこそ、市長はあらゆる政党の方々と対等な関係を築くことが望ましいというのが、私の考えです。

選挙において特定の政党から強い支援を受けた場合、その政党の意向をふまえずに市政運営を行うことが、果たしてできるでしょうか。

もちろん、政党が議会制民主主義において重要な役割を果たしていることは十分に理解しています。そのうえで、なお私は独任制である市長は無所



属が望ましいという考え方です。

だからこそ、政党の支援に寄らないサポート体制を構築し、無所属の候補者がフェアに挑戦できる環境を創ることが重要となります。

### 市民が議論する風土づくり

言うまでもなく、主権者は市民の皆さんです。あくまで、市長は市民の負託を受けた存在に過ぎません。

市民がこのまちをどうしていきたいのか

8年間、市政運営において私が最もこだわった点の1つです。何度も何度も地域を訪れ、市民の皆さんと対話をを行う。そのなかで、現在の四條畷市の状況や課題への理解が相互に深まり、未来への打ち手が導き出されます。

そして、市長選挙は4年に1度、自分のまちのことを市民の皆さんができる機会であるとともに、まちづくりの優先課題を変えるための転換点でもあります。

だからこそ、定期的に市長を入れ替わり、市民の皆さんのが市の優先課題について意思を示すことで、これまでとはまた違った市の魅力を伸ばしていくことができると、私は考えます。

しかし、こうした議論は現在、選挙期間のわずか7日間でしか行われることはありません。そのため、今回こうしたプロジェクトを行うことで、選挙が始まってから「AさんかBさん、どちらが良いか」という単なる選択だけではなく、今の四條畷市の課題を見つめ、それに対応できるリーダーはどんな人物が良いだろうかという議論に繋がると考えました。

### 後任の決定

プロジェクトの結果、「四條畷市民の力」として、私と同じ年の36歳で元四條畷市職員の「ぜにや翔」さんを市長候補（立候補予定者）として決定しました。ぜにやさんのプロフィールについては次ページ

に掲載しております。

なお、ぜにやさんが後任の立候補予定者として決定するまでには、様々な事象が発生いたしました。紙面の関係上、それらすべてをお伝えすることができませんので、詳細については東修平公式HPのブログよりご覧ください。

改めて、8年もの間、温かくお支えいただきましたすべての皆さんに心から感謝を申し上げます。今後は一人の市民として、これまで培ってきた経験を活かし、四條畷市の発展に少しでも役に立てるよう尽力してまいります。ありがとうございました。



東修平公式HP  
ブログ

# ぜにや翔 36歳

妻・息子2人と江瀬美地区に在住

1988年 8月19日生まれ

四條畷市 田原地域出身

四條畷学園幼稚園 卒園

よく走り よく転び 怪我をたくさんした  
幼少期

四條畷学園小学校 卒業

バドミントン部創部以来初となる全国  
大会出場

四條畷学園中学校 卒業

主将を務め創部以来初となる全国大会  
優勝を果たす

東大阪大学柏原高等学校 卒業

大阪一の強豪校に進学  
全国大会3位入賞

2007年 中央大学 法学部 法律学科 入学

勉学とバドミントンに没頭する学生生  
活を送る。全国大会3位入賞、17年ぶり  
のリーグ優勝を果たす。学生のオリン  
ピック ユニバーシアードに日本代表と  
して出場 5位入賞、日本代表入り

2011年 トナミ運輸株式会社 入社

日本一連覇、日本代表として 2012 ロン  
ドンオリンピック同行 海外を転戦。怪  
我を機に違う環境で挑戦したい思いと  
まちづくりに関心があり、転職を決意

2014年 和歌山県有田市役所 入庁

教育委員会、経営管理部、経済建設部  
で様々な経験を積む。ふるさと納税に  
おいて、楽天ショップ・オブ・ザ・イ  
ヤー 2016 ふるさと納税賞を受賞

2019年 四條畷市役所 入庁(2024年11月退職)  
地元へ貢献するため四條畷へUターン、  
総合政策部、財務部に従事。行財政改  
革や財政構造の健全化を進め「未来へ  
の投資」に向けた取組みの一端を担う

# ぜにや翔さんに、 私はバトンを託したい

全国公募209名から、私の後任として「四條畷市民の力」の代表となった、ぜにや翔さん。

なぜ、ぜにやさんが次のリーダーとしてふさわしいと考えるのか、大きくは4つの理由からです。

## 1 誠実さ・真摯さ

四條畷市役所の職員として、職務に誠実で周囲からの信頼も厚く、若くして財政課の主任を務めておられました。  
すべての市民の代表として、時に非常に厳しい判断を下さなければならぬ時にあっても、ぜにやさんであれば、真摯に市民や職員の声に耳を傾け、誠実に決断できるリーダーになれると確信しています。

## 2 努力する力

市政のあらゆる分野に携わるリーダーは、日々の勉強や研鑽が欠かせません。  
子どもの頃からひたむきに練習に励み、バドミントン日本代表選手として活躍されたことから分かるように、ぜにやさんは努力を積み重ねることができる人物です。

## 3 公務員としての経験

有田市役所の職員として、ふるさと納税を担当された時には、  
地域を自らの足で駆け巡り、寄付額を約3.5億円増額させるとい  
う実績を導きました。  
一方で、四條畷市役所の職員としては、企画や広報、財政などの  
部署で、市全体を俯瞰的に見る経験を積まれています。

## 4 なわけへの熱い想い

四條畷市で生まれ育ち、地元に貢献したいとの思いで30歳の時  
にUターンされたぜにやさん。  
その後、市職員としての活躍を経て、公務員としての安定した  
立場を離れ、リスクを覚悟で市政へと挑戦されました。  
なわけを絶対に発展させるんだという想いは、8年前の私とま  
さに同じ気概を持っておられると感じています。

第5代 四條畷市長 東 修平